



263.8
16



始



513466

263.8-16

丁抹イェンゲン
大學教授
在學士
文學院
前田太郎譯述

エスペルゼン博士原著

エスペル
ゼン教授
語學教授法新論

東京 東亞堂發兌

大正
2.6.19
内交

ERMELUNDSLY
GENTOFTE

Nov. 21. 1912

My dear Sir,

Thank you very much for your card. I have no objection to your bringing out a Japanese translation of my, "Sprogundervisning" (How to Teach a Foreign Language); indeed, I feel very much honoured by your proposal and shall be proud to see my book in that strange garb.

I hope you will send me a

copy (or I should prefer a few copies) when the book is out.

When you ask me to add something about my recent opinions with regard to the teaching of foreign languages, I am afraid I have nothing new or interesting to add to what you will already find expressed in my book.

Yours very sincerely

Otto Jespersen

序

語學研究法の進歩につれて、その教授法も追々面目を改めて行くことは、必然の事實である。その方法たるや、古くは徹頭徹尾文法の基礎の上のみ置かれ、而かもその語詞を取扱ふに方つては、これを個々に分離して考察する方針に則つた結果として、教授せらるゝ者の心眼には、さう云ふ各語詞の相互關係は勿論、廣く一般に言語學上の現象が、すべて單純に靜的なもの、無機的なものとして映ずるに過ぎなかつたので

序
二
ある。然るに學術の勃興は、科學のあらゆる方面に於ける在來の惰眠を覺醒し、語學教授法も又頓に舊套を脱して新衣を裝ふやうになつて來た。すなはち言語に關する問題は、すべて動的に觀察し、有機的に攷究すべきもの、換言すれば生きたるものとして處理すべきものであると云ふことになり、随つて例へば文法を教授するに際しても、最も重きを文章法に置くやうな趨勢を導き出したのである。而かも時代の進運は、駭々乎として一刹那も停止するものではない。現時の語學教授法は、漸く文法の不必要を認容

せんとする機運を誘ひ、遂には極端にこれを呪詛する學者の出現をさへ見るに至つたのである。オットー、エスベルゼン博士は、言語學界に於ける北歐の重鎮である。博士は音聲學者として夙に盛名を斯界に馳せ、又語學教授に關する實際的研究家として、該博なる造詣と卓拔なる識見を有して居る學者であつて、その獨創的な意見には、到底他人の追隨を許さない所があり、その根本的な攷究には、奕々たる精彩の燦として人目を射る味がある。さうして博士の所説は、何れも直截簡明で、一點曖昧模稜の影を宿さな

序
三

い。随つてその論や、堂々として四方を睥睨する概があるのは、吾々の見て以て快とする所である。さりながら博士一流の見解を、飽くまでも擴充しやうとする努力の結果、動もすれば獨斷に陥つて居る個所もないではない。これは博士のために聊か遺憾とする所であるが、如何とも致し方がない。要は唯だその所論の是非に就て、常に明晰なる批判的良心を備へて居ることに存するのである。

今この好著を譯出するに就て、博士の快諾を得たることに對して、滿腔の感謝を捧げると共に

に、淺學菲才、恐らくは累を博士に及ぼすことであらうと、窃かに恐懼の念に堪へない次第である。

小石川の僑居にて

譯者 識

大正二年五月下浣

凡例

一、本書は原名を *Sprogundervisning* (語學教授法) と云つて居るが、余は遺憾ながら、字引と首引とでなければ、デンマーク語を読むことが出来ない。然るに幸なことに *Sophia Yhlen-Olsen Bertelsen* 氏の盡力によりて英譯されて *How to teach a foreign language* と云ふ題號になつて、世に行はれて居る。さうしてその書の巻頭には、次の如き博士の序文を載せてある。

When, in accordance with a wish expressed by English and American friends, I determined to have my *Sprogundervisning* translated into English, I found it difficult to decide what to retain and what to leave out of the original. So much of what I had written appeared to me to apply more or less exclusively to Danish schools and Danish methods, and I had too little personal experience of the practice of English teachers or of English school-books to be quite sure of the advisability in each case of including or excluding this or that remark. I have, however, made my choice to the best of my ability, and if some parts of my criti-

cism are not altogether applicable to English methods, I hope I may be excused on the plea that what is now the really important thing is less the destruction of bad old methods than a positive indication of the new ways to be followed if we are to have thoroughly efficient teaching in modern languages. それで余はこの英譯文を重ねて翻譯することに決定し、その旨を書面に記して、博士の許可を乞うた。ところが間もなく返事が来た。それがこの巻頭に出してある書翰である。先づざつとかう云ふ徑路を辿つて、この譯本が生れたのである。

一、元來この書物の中には、獨逸語や佛蘭西語が大分出て居る。それで余は、前後の關係及びその本文の性質より見て、許容せらるべきものと思つた部分だけは、これを悉く英語に翻譯したが、その然るべからざるものは、その儘にして置くことにした。百五十七頁から百六十頁へかけて見えて居る佛蘭西語の如き、實にその一例である。

一、なほ又英國人が讀むための書物を、日本人が讀むための書物にするために、機に臨んで、文中多少の改竄を施した點がないでもない。

一、且つ少しく複雑な音聲學的研究に立ち入つて居つて、實を云ふと、英獨佛三國語の音聲學に關する概括的智識を持つて居ないと、稍々理解に困難であらうと思はれるところから、第十章の中、約七頁の本文を除き去ることにした。

一、それから脚註は、當初、全くこれを載せぬと云ふ方針にする積りであつたが、必要と考へられる性質のものに限りて、採用することに變更した結果、取りて以て適宜に本文の中に織り込んだものも決して尠少ではない。

一、最後に、本文では、各章の區別は、單に1. 2. 3. 4.などの數字で示してあるのに過ぎない。故に余は、適切と思はれる名稱を、任意に採擇して、彼等に附與することにした。又頭註の如きも、全く余の考案によつたもので、これは偏へに、讀者の利便を圖らうと云ふ微意から出たものである。

ゼンペル教授語學教授法新論——目次

第一章 緒論

断片的な暗示——改革運動——言語教授法は改善せざるべからず——その第二期に入る——果して如何なる案か——種々な名稱——適當な名稱の得られぬ理由——外國語教授法を立案した諸家——新式などとは云へぬ——實地經驗をした種々の學者——唯だ一人の妄想ではない——近代語は生命のあるものとして取扱はれたい希望を持つて居る——言語の使命——言語は最も完全な最も豊富な最も善良な交通上の手段——外國語を學ぶ目的——如何なる國語を選択すればよいか——借方と貸方との間の權衡——比較言語學を専門にして居る學者——言語の理論めいた研究は少しでよい——ラテン語やギリシヤ語の課目——外國語の教授によりて訓練される能力——他の能力——教授法を案出する場合に以上の諸點を參照する——生徒の心掛——ローマの諺——教師のつとめ——試験の束縛——生徒の方では餘計に知識を得て居ることになる——語學を習ふ目的——外國語教授の最高目的

第二章 文例

連絡のとれて居ない言葉はパンの價値はない——連絡のない文章の例(その一)——連絡のない文章の例(その二)——奇怪な叙述——連絡のない文章の例(その三)——連絡のない文章の例(その四)——拙劣な獨逸語讀本の文例——キャーケガールドの言——單文組織に基づいて出來た教科書の中にも非常な差別がある——文例がばらばらに離れて居る例——何故にこの組織が久しく勢力を持続して來たか——生徒を薰陶すること——生徒の興味を惹くこと——餘計な文例——生徒は大抵のことは辛抱する——文章に連絡のない結果誤りに陥り易い——その實例——實世間に應用の出來ぬ文例——かう云ふ種類の文章——生徒の抱き易い考へ——熟語的文例を等閑に付してはならぬ——文字通りの翻譯は危険である——教科書計りでは國語は分らぬ——言葉の活用が利かない——獨逸の學校長が書いた教育上の論說——外國人の作つた文章——文體の特徴——言葉の選擇——あまり用ゐぬ語句や言葉——學者にはありふれた言葉の外に用がない——ゴールドシュミット女史の繪畫的教授法——要りもせぬ言葉——文法を取扱ふ場合にも何の用もない言葉の數々を習ふことになつて居る——普通の形式に外れて居る——たはごとの朗讀——たはごとは殆ど全く不必要——スキート氏の云つて居る除外例の教へ方——よく引き出される言葉

第三章 讀本の選擇

讀本の選擇に關する六ヶ條の要求——連絡のない文章から受ける害を免れやうとする結果——短かい文章から長い文章に移る——説話——多數の説話が連續して出て來る結果——外國語の教授に説話を用ゐる最良の方法——性質上叙事的な文例——年齢の差異——小兒向の文章と外國語の教科書——外國語に移されると話が一種の誘惑力を具へる——詩と散文——本文は平易なのがよい——讀本の内容——スチュアルト、ミルの言——言語教授上に於ける讀本の選定——語學に關する難易——先づ一綴りの言葉から初める——所謂發音の困難と云ふ意味——新語はなる丈け少しにする——新しい語は間を置いて出す仕組にする——有益な言葉を若干挿入する——五個の絶對に必要な言葉を習ふ方が二十五個の大した必要もない語を習ふよりも勝つて居る——教科書の用語が不適切の場合——文學的の語句や不要な言葉は省略したり改削したりする——文章は了解すべきものである——改訂の見本——文法上の問題——連絡を附けると云ふ言葉——理解の仕方——連續した文章に移る——教育上から見た文法上の不規則——不規則形は文法に收容される——外國語の文法を書く場合には誤りを傳へ易い——ストーム氏の批評——可成的根本的に不規則を除く——不規則變化を教へる

時期——何の意味もない離れくの文章の行列が盛んに用ゐられるわけ
——不規則から與へる利益——自然と云ふことが吾々の嚮導者——不規則は
語構成上の偶然の出来事——初歩の時代に不規則形を習つて置いたこと
が利益だつたと後になつて分る——文章は一樣に簡単に明晰に作成する
ことが大切

第四章 讀本の使用法

余が入學當時の語學教授法——教師の合の手——返事は外國語——その時代
では急速と云ふことが教育上の特色であつた——この教授法の批評——こ
の教授法の缺點——なほ他の不利益——實例、その一——實例、その二——翻譯が
主なる目的では外國語の特色を了會するとは未だしい——翻譯の實例——
言葉の排列が變る——即座に獨逸語を翻譯する習慣の人——翻譯者が考へ
る必要のある問題——翻譯時の精神活動は小兒の能力以上である——外國
語を知らない人は自國語が分らぬ——自國語に堪能な人は必ずしも外國
語に堪能ではない——誤譯の原因——ダーウイン氏の疑惑——ガレンツ氏の
の說——外國語を教へる第一條件——翻譯は何故重要なものか——外國語を
理解するには唯だ自國語に移すより外に方法がないと云ふ說は事實で
はない——外國語の意味は明白に分つて居つてもそれを翻譯することが

出来ない實例——翻譯する必要がないと思はれる場合——自國語に明るく
なる技術と翻譯の技巧——ハマーントンの言——習慣——普通の程度で外國
語に明るくなる能力を持つて居る人は澤山ある——二個の言語を話す國
民の例——翻譯術練習の機會を得る人は至つて少數である——翻譯が巧妙
だと云ふこと——外國語研究上の吾々の理想——同じ意味を現はす語でも
それと聯結して居る觀念は國語によりて一樣でない——如何なる翻譯で
も曾て完全に原型を再現せしめたものはない

第五章 種々の教授法

翻譯の使用される場合——翻譯を使用する價值は場合によつて異なつて
居る——ビールバウム氏の言——直接觀察法(直接認識法)——間接認識法(繪畫)
——繪畫の掛圖——反對說——教師の心がけ一つでこの方法は危険なことば
ない——第二の反對說——第三の反對說——傾聴に値する反對說——フロイデ
ンタール夫人の教授法——繪畫は外國語を教授するには確かに有効であ
る——學校に備へつける繪畫、製作品——備へ付けの繪畫でなくても他に方
法がある——圖畫による練習——その方法——あて推量——彼等のあて推量は
すべて過まつて居る——言葉の意味を推度する法——細かい區分から大き
な區分へ——言葉の類似——辭書の註釋——翻譯が説明に及ばない場合——こ

の反對の場合——教科書の註釋に説明を用ゐること——教師が外國語を讀む方法——身振りで言葉の説明する——一種遠廻の方法——初學者にとりて最良の教師——質問に就て教師の注意すべき點——教師の参考になるべき要點——詩句の説明法

第六章 翻譯、音讀、書取

二四

翻譯を使用することに關して到着した結果——觀察は翻譯よりも勝れて居る——絶えず生徒に質問の矢を放つ方法——翻譯をさせるならそれには方法がある——翻譯を唯一のもの、やうに思つて居ると外國語が悪影響をうける——善良な外國語は外國語の課業の際に學べるものではない——余が翻譯練習法——精巧な翻譯文例——了解するには面倒でないが翻譯するに困難な文章——複雑した文章の處置——余の說に對する反對說——これに對する余の所說——音讀——許容してはならぬ事項——聲を揃へて讀む利益——歌を歌ふこと——プアイル氏の教授法——學んだ言語材料を隨意に用ゐたいと云ふ衝動——氏の教授法の缺點——氏の說によりて學び得たる點——發音の模倣——本文を記憶させること——不知不識の間に外國語で何か話すことが出来るやうになる——誰にお鉢が廻つて来るか分らぬ——生徒の名前を外國語で教へること——教授上の秘訣——生徒の進歩が鈍り出し

た場合の處置——あまり岐路に入らないやうにする——書取の練習——その方法——書取の利益、不利益

第七章 語法教授上の要點(その一)

一五

數年間外國語を修めても數詞を會得しないものがよくある——その原因——教科書からアラビヤ數字を全部削除するがよい——數學的練習の實施——生徒の學力を試験する一法として數詞を適用してもよい——生徒の返答は完全な文章の形式に書かせる——出来る丈け多數の質問を聞く——本文からかけ離れることをあまり早くから獎勵しない方がよい——生徒同士質問をさせる——その方法——あまりに漠然たる文章は質問には不適當である——繰返し物語ること——その利益——文章の改造——以上の練習を混合的に行ふ方法

第八章 語法教授上の要點(その二)

一七

ペテルセン氏の所論——人工的教授法と自然的教授法——今日なほ古い文法教授が繁榮して居る——諸語によりて學ぶ語例——排斥すべき外國語教授法——たはごとは大抵呑み込んで居る——舊式の教育では讀本の言葉を讀誦すればよかつた——文法上の目的のために言葉を離して教へること

は危険である——習慣と語法との扞格——類推作用——法則を知らないでも類推作用でやつて行ける例——言語を修得することは偶然の機會に基づくものではない——品詞を完全な文章の中に織り込ませてその問題を會得させる方法——この方法の實驗法と特色——グーテの至言——ウエンド氏の言——新式教授法の有功なることを示す實例——ストーム氏の言——模倣的教授法

第九章 語法教授上の要點(その三)……………一六

文法教授に於ける「何故に」と云ふ質問に對する返答——シユハルト氏の言——新舊教授上ある相違の點——發明的方法——ワルテル氏の授けた練習問題——一度に時法を一つ教へれば充分である——練習問題によつて法則を學ぶ——性に關する練習方法——類推的方法——教師の主要なる仕事——教授上普通の順序は言葉の種類の中で優越して居ると云ふ無意味な順序に基づいて居る——各言語間の比較——言語學的智識の必要——連續した行爲をその簡単な成立要素に分けさせる方法——同意語を組織的に集めること——外國語の原理の會得に關するワルテル博士の方法——辭彙的材料を調査すること

第十章 發音の取扱方……………三三

舊式論者の反對論の筋道——これに對する余の答辯——統一的發音符の符牒——外國語の發音法を學ぶ理由——舊式の發音による不利益——發音練習法——統一的發音符に對する賛否——音構成上の誤謬——音使用上の誤謬——綴方と發音——マクスマミュラー、フイエトル二氏の言——反對說の一——反對說の二——古來から行はれたる發音表示の種々の組織——統一的發音符の學習上簡單なることを示す實例——何事でも口授する方法——綴方のみを教へる良法——綴方と統一的發音符とを教へる方法——統一的發音符のみを教へる方法——教師が専ら統一的發音符を使用する期間——統一的發音符の特長——統一的發音符から綴方へ移るの困難でない——その移り方——統一的發音符は綴方教授の開始と同時に廢止すべきものではない——近世語學上の音聲學及統一的發音符の適用——語學蓄音機

第十一章 餘論……………二六六

近代語教師の使命——マシーセン氏の教授法——獨逸學校教育に於ける家庭讀書法——自分の讀んだものに就て談話をする——外國語で創作的に何か書く——題目を制限する事——手紙の體裁——期限の短かい事——時間の分

目次

配がみじめである——外國語を習ひ初める年代——試験——セーラー氏の言——
試験制度の缺陷と教授法の改善——教師——吾々の方法——この教授法は實
際生きて居る

目次終

エスペル語學教授法新論

文學士 前田太郎 譯述

第一章 緒論

余が近世語學の教授法に改善を加へる事業にたづさはるやうになつて
から二十年程にもなるが、今日でこそこの問題の参考になる書物や論説
が澤山あるけれども、その時代にはさうは行かなかつたので、唯だ僅か
に断片的な暗示を、就中スキート (Sweet) 氏やストーム (Storm) 氏の著述の
中から得るに過ぎなかつたのである。併しながら程なく、この問題に關
する運動が着々として成功する時期となつて來た。殊に獨逸では、この
運動が盛んであつた。スカンヂナビヤでは、フェリックス、フランケ (Felix)

断片的な
暗示

Frankel) 氏の、小冊子ではあるが名著と稱すべき『言語の心理的生理的基礎より見たる實際的語學習得法』(Die praktische Spracherlernung auf Grund der Psychologie und der Physiologie der Sprache) を余が都合よく補綴して、これを公けにしてからのことである。丁度それと同じ頃、諾威のウエスターン (Western) 氏と瑞典のルンデル (Lundell) 氏とが、同様な思想を抱いて打つて出たが、一千八百八十六年、ストックホルムの言語學會で、前記二氏及び余は、茲に改革運動の火蓋を切つたのである。それで勿論吾々は一の學會を建設し、これに命ずるにクウスケ、タンデム (Quousque tandem) と云ふラテン語を以てした。ラテン語が分らない人のためにこれを譯して見ると、『吾々は速やかにこの問題の結着をつけることが出来ないか』と云ふことになる。元來この語は偉人シセロが用ゐた言葉のあやで、近頃ヒェトル (Victor) 氏が『言語教授法は改善せざるべからず』(Der Sprachunterricht muss umkehren) と云ふ鋭鋒當るべからざる小冊子の巻頭に引用した語句である。さてわがスカンデナヴィアの學會は、それから片々たる冊子ではあるが若干の出版物を

改革運動

言語教授法は改善せざるべからず

その第二期に入る

なし、且つ一時は、年に四回の割合で、雑誌を發刊して居つたこともあつたのである。さりながらこれに關する運動は、間もなくその第二期とも云ふべき、而かも一層重大なる時機に到達したのである。即ち教師は親しく教授上に改正案を實施するやうになり、又教科書の編纂者は、益々これを參酌するやうになつて、その結果現今に於ては、この案は將に永久に使用せられやうとする幸運に際して居ると云つてよいのである。少なくとも今の若い教師が、この問題に就て何なりとも議論を吐いて居る間は大丈夫である。

然らば余が上來仄めかしたその案とは、果して何であらう。その案の名稱は何と云ふのかと聞かれると、聊か當惑せざるを得ない。何となれば、この案の外にも、澤山な名を持つて居る同じやうな案があるが、それとこの點に於いて、事情が似寄つて居るのである。そのやうに雑多の名稱があるが、一つとして肯綮を得て居るものがない。併しそれを悉皆茲に書きしるせば、その案が如何なるものであるかと云ふことに就て、

果して如何なる案か

種々な名

稍々豫備的概念を與へることが出來やうと思ふ。ある人はこの案を『新式』とか『二層新式』とか稱して居る。英國では、屢々『新傾向』と云ふ評語をうけた。又ある者は『改定案』と名づけた。それから『自然的』だとか『有理的』だとか『正しい』とか『會得し易い』とか云ふ名稱もあつた(商人が廣告に品物の自畫自讃をやるやうに、自分の品物を自慢することがよくないことだらうか)。それから『直接的』と云ふのがある、これは大分に近い。『聲音學的』と云ふのも、全豹の一斑を示して居るが、どうも充分とは云ひ兼ねる。又『統一的發音符による方法』と云ふのも同様である。何故かと云ふと、聲音學と統一的發音符と丈けでは、不充分だからである。『摸倣的』と云ふのもあるが、これは他の方面を強く云ひ現はして居る。なほ建設的に對比すべき『分析的』と云ふのがあるが、これは恐らく他の方案にも適用が出來やう。それから『具體的』と稱するのは、幾分この案の精神を捉へて居るやうであるが、獨逸語の直覺法と云ふのも、やはりさうである。又『會話法』と云ふのを聞くと、吾々は甚だしくベルリッツ學派(Berlitz schools)のことを想ひ起すので

適當な名稱を得られぬ理由

外國語教授法を立案した諸家

ある。次に『非古典的方法』とか『非文法的方法』とか『非翻譯的方法』など、非の付いた言葉は、拙悪な上に愚かにも消極的である——結局吾々は適當な名稱を得やうとした企てを放棄し、さうしてこの事の困難な理由が、吾々の改革の必要のあつた事柄は種々あつて、單に一件に止まらなかつたことに職由して居ることを認める外に道がないことになるのである。而して云ふ迄もなくこの事は、改革者が各々種々の黨派に分裂して、一方がある一の點を重要視すると、他方は又外の條件を主張するやうな形勢を誘導したのである。併しながら外國語を教授する場合に、從來踏襲されて來た型以上に出て好結果を得やうと希望する人に取りては、この案は確かに十分参考になるのである。

又ある命名者の云ふやうに、この案を『新式』と名づけることが出來ないことは、偶ま以てこの改革事業のために結構なことである。既に外國語教授法に關しては、古くはランキヤスター(Lancaster)ハミルトン(Hamilton)ジャコトット(Jacotot)諸氏の案があり、後にはロバートソン(Robertson)オル

新式など
めと云へ

レンドルフ(Ollendorf)アーン(Ahn)ツサン、ランゲンシャイト(Toussaint-Langenscheidt)プレッツ(Plötz)リストフ(Listov)諸氏の法もあり、近くはベルリッツ(Berlitz)及びゴアン(Gouin)氏の案もあることであるから、『新式』など、云ふことは出来ない。かの北方の古代の神話に、ハイムダル(Haimdall)と稱する神に、九人の母があつたと云ふことが見えて居るが、今吾々の改定案と云ふものにも、少くとも七人の賢明なる父親があるのである。この點に於てこの案は、上に掲げたすべての方法とは根本的に相違して居るのである。もとくは是等の案は、何れも唯だ一人の名になつて居り、隨てその人は、唯だその法の立案者として記憶せられるのが普通である。之に反して吾々の案は、その淵源するところ、多數の人々に負うて居るのであつて、その人々等は他の理由によつて、近時の最も卓越したる言語學者の中に數へられる、例へばスキート、ストーム、ジーベルス(Sievors)セース(Sayce)ルンデル、その他の學者である。さうして彼等の懷抱して居つた意見は、多數の教育者や教師が、經驗上新粧を施したり、改竄を加へた

實地経験
をかした
種々の學者

唯だ一人
の妄想で
はない

りして、これを實地に採用したのである。順序不同であるが、茲に書いて見ると、クリングハルト(Klinghardt)ワルテル(Walter)キューン(Kühn)デール(Dorn)クーン(Quiel)ロスマン(Rossmann)ウエント(Wendt)ウイデグラー(Widger)ウエスターン(Western)ブレケ(Breke)の諸氏である。この二つの群を劃する境界の上に、殊にヒエトルとパウル、パシー(Paul Passy)との二氏が立つて居るのである。この事實は理論が、つた詭辯めいたことは、吾々に關係がないことを示して居る。それは唯だ一人の妄想ではない。現時に於けるあらゆる最善なる語學上及び教育學上の思想を打して一丸としたもので、その思想は種々の異なつた源泉から生じて、巧みに相結合して、舊來の方法を顛覆させやうとして居るのである。近代語は曾ては小學校や大學で、恰かも厨女のやうな取扱ひを受けたものであるが、今こそ壯年の時代であると云ふ感じを起して、一言不平を云ひたがつて居る。即ち種々彼等に關する在來の教授法なるものは、古代語を教へるには、或は充分かも知れないが、近代語を授ける上では全然不適切で、到底これを忍ぶ

近代語は
生命のあ
るものと
して取扱
はれたる
希望を持
つて居る

ことが出来ないからである。彼等は生命のあるものとして取扱はれたい希望を持つて居る。故に近代語の教授法は、丁度人生が一瞬も休息することなく刻一刻變轉するやうに、潑刺として且つ活用的でなければならぬのである。

さて近代語教授の目的とする所は何かと云ふ問題が出て來るのであるが、然らば何故に吾々は生れた國の言葉を話すのかと反問したくなる。その理由は云ふ迄もなく、同じ國の人と同じ社會に棲息して、意義ある生活を營むため、即ち他人の心理的内容のあるものを受け取る一方には又、吾々の心内に存して居る或物を他人に傳達し、斯くの如くして互に思想や感情や意思を交換するためである。元來言語それ自身には、意義があるものではない。恰かも鐵道線路と同じ事である。精神と精神とを繋ぐ手段となつて、初めて價值があるのである。交通の利器となつてこそ、鐵道の眞價が發揮せられるのと同じ事である。併し言語は必ずしも思想交換上、唯一の手段ではないので、表情とか身振りとか、その他種

命
言語の使

言語は最
も完全な
最も豊富
な最も善
真な交通
上の手段

種あるが、耳をひどく打つことなどでも、それを面のあたり見る方では、その男の胸中を読むことが出来るのである。けれどもその中でも、言語は最も完全な最も豊富な最も善良な交通上の手段であつて、多くの場合個人個人の間に横たはつて居る心理上の谷に橋をわたすものであるから、若しこれがないと云ふと、人は個々孤立してさまよひあるき、あらゆる精神上の交通を遮断せられることになるのである。

それから外國語を學ぶ目的は、吾々の國語の通じない場所と、交通の手段を得る點に存しなければならぬ。何故かと云ふに、その場所には又、自分がある理由のために、思想を交換したいとか、或は少なくともその人々から思想を受け継ぎたいと思ふ人が住んで居るかも知れないからである。さうして實際既にこの點に、吾々は果して如何なる國語を選択すればよいかと云ふ問題に對する答案が横たはつて居るのである。今試みにフーシュー(三三)島の土語を操つて、その土人と談話を交へることが出来る利益と、佛蘭西語や獨逸語がすらくと口へ出る利益とを比較し

外國語を
學ぶ目的

如何なる
國語を選
擇すれば

て見るがよい。若し吾々がある外國語を學修する場合の希望が、單にその國人の思想を理解することが出來、その國の作家の著述が自由に咀嚼の出來る點に止まつて、而かもその國語を利用して、自己の思想を發表することなどは、頭から豫期もしなければ、又それだけの能力もないと云ふ次第だと云ふと、態々その國語を學ぶよりも、寧ろそれから翻譯したものを讀んだ方がよくはないかと云ふ疑問が常に起るのである。殊に死語の場合は一層さうである。元來翻譯が原本の完全な代理になるものでないことは勿論である。がそれかと云つて翻譯からよりも原本から餘計に利益を得たいと云ふ考へなら、餘程よく外國語を呑み込まなければならぬ。さうすると借方と貸方との間の權衡はどんなものかと云ふ問題が起つて來る。即ち外國語を學修する仕事と、かうしてある作家の作品から得られる餘分の利益との關係はどうかと云ふことになるが、これは勿論個人個人に就て、別々に決定すべき性質のもので、且つ酌量すべき種々の事情があるのである。しかし大抵の人は英譯のトルストイ(Tolstoi)

借方と貸方の權衡

やオマール、カヤーム(Omar Khayyam)の作物を讀んだ所で、何も損をする譯でもなからう。

さうすると茲に、外國語を習ふことは、なほ他の理由があると、反對を唱へる人があるかも知れない。例へば比較言語學を専門にして居る學者は自分自身のため計りに、外國語を學ぶのであるから、それが曾て知らなかつた事柄を學ぶ手段にならうがなるまいが、なほ他の方法を探れば、もつと適宜に修得することが出來やうが出來まいが、そんな事は一切お構ひなしである。随つて全く文字を有しない様な貧弱な國語に、非常な興味を持つ場合も屢々あるであらうし、その國語を話す國民とは、未だ永劫決して談話を交へることのないやうな場合もあるであらう。併しながらかう云ふ風な學修法は、彼等自身にとりては、例へば機關車の構造や、鐵道の信號のやうな、思想を通ずる方法に比較すべきもので、唯だ恐らく稍興味が多い位に止まるであらうが、兎に角明かに特種な研究と云ふべきものであつて、人は普通何故に外國語を學ぶかと云ふ理由と

比較言語學を専門に學ぶ者

言語の理論
を研究し
たい

ラテン語
やギリシヤ語
の課程

は没交渉なのである。勿論教育を受けた人が、言語の生命に關する問題に就て、幾分の知識を得るとは利益には相違ないが、併し余の考へでは、これから以下説く所でも、ほんの少し計り、言語の理論めいた研究に觸れさへすれば、それで充分であらうと思ふ。元來學校の課程に外國語を加へてある主意から考へると、餘計に理論が、つた説明をしようと、それだけその趣旨に戻るわけになるのである。

歐羅巴の學校教育に、ラテン語やギリシヤ語の課程を設けてあるのも、生徒に論理を教へ込むのが目的ではない。固よりこの點にこれら語學の眞價が存して居るものだと云ふ議論は間々主張されるのであるが、それは今論すべき限りではない。併しながらこの問題に就ては、多辯を費やす必要がない。殊にあらゆる錚々たる古典學者及び歐羅巴の學校で授ける古代語學が、重要な位地を占むべきものなることを主張する人々でさへも、既に久しき以前に於て、ラテン語やギリシヤ語がその構造上、例へば佛蘭西語や英語よりも論理的であると云ふ意見を、非學者的の態

外國語の
訓練に
よる能
力

度で放棄し去つたのである。

併しながら又一面に於て、看過してはならぬことがある。それは何事でも學修する場合に、その考へて居る目的も便るべき方法も、何れもよく當を得て居れば、習得した事柄がその人の重なる能力を幾分か直接に發達せしめることになることである。それから又外國語の教授をすれば、外國語で書いてある事柄の内容に就て、種々充實した知識を獲得することが出来るが、なほその上に次に示すやうな肝心な能力を訓練するのに、適切な方便となるのである。

観察力(正當な觀察をすること、他に倚賴せず観察すること)

觀察した事柄を種々の見地から分類する能力

觀察によりて蒐集した材料を根本にして、一般に通ずる法則を推斷する能力

結論を作り出し、且つこれを從來未だ曾て指を染められてない他の場合に當て嵌める能力

他の能力

教授法を案出する場合に以上の諸點を以て参考とする

これらは勿論既に記載した能力であるが、又その外に廣く一般に讀書する能力、又よく文意を咀嚼して讀書する能力、考察を加へて讀書する能力なども發達せしめる必要があるのである。

吾々が教授法を案出する際、就中これを學校に應用する場合にも、以上の諸點を參照しなければならない。今假りに外國語を教授する場合に、教師の云ふ言葉や、書物の中に書いてある文句を、唯だ鸚鵡的に繰り返すやうな方法があるものと假定したら、そんな方法は吾々の學校では採用することが出来ない。又余の知つて居る範圍内では、今日まで誰一人さう云ふ純粹な鸚鵡的方法を試みたものもないのである。

教師は生徒が問題に興味を感じるやうにしむける必要がある。生徒の方では、勉強すればそれ相應に酬いられる所があると云ふ、即ち骨折り甲斐があると云ふ、明快な意識を持たなければならぬ。彼等は外國語を教へて貰ふことが、一つの鍵を授かるやうなもので、それを使用すれば、澤山な財寶を取出すことが出来ることを會得し、また彼等がもてあそぶ

生徒の心掛

ローマの諺

ことの出来る文學には、許多の作品があつて、それらが又彼等を歓迎して居ることを考へ、そして自ら外國語の教授を受ける間は、關係のある土地や人民に就て、出来るだけ廣く興味を感じ、随つて自ら進んで、是等の點に關する知識を廣めるやうに心がけねばならぬ。斯の如くにして初めて、彼等の全生涯に對する善良なる基礎が設けられるのである——さうしてノン、スコレー、セツド、グイテー (non scholae sed vitae) と云ふローマの諺は、英語に直すと not for school, but for life となるが、これは大抵の人、殊に親達が翻譯するやうに翻譯してはいけないのである。即ち學校の課目として勉強せずに、天晴れの試験に通過する目的で勉強しよ、さうすれば汝は功名富貴を求めることが出来、その試験の功德によりて、高位顯官に上ることが出来ると云ふ鹽梅に解釋してはいけないのである。學校はその生徒の生涯のためを思つて、最善の方法で彼等に飾りを施してやらなければならぬ。さうして教師は、試験施行の必要に心を奪はれて、爲めにそれ以外に良法のあることを等閑に附したり、或はそれを阻

教師のつとめ

試験の束縛

害するやうなことがあつてはならない。試験に就ては後に一言することとし、茲では單に何事も試験づくめで試験に煩ひをかけることが、結局反對に試験の累を被むることになる事に就て、教師の反省を促したいと思ふ。余がこれから引き続きいてお勸めしたい事柄は、大抵尤もだと教師方が是認せられたと云ふとを、折々聞いて居る。但し試験と云ふものがあつて、元來が試験を受けさすのに都合のよいやうに、生徒を躰けるのであるから、是認はするが、實施しかねる憂ひがあるといふことである。余は之れに對してかう返答をする。方法を誤まらずに教授をすれば、教へ方も活氣が出來、興味が生ずるものである。而して試験の時期になると最初から教授法が試験執行の必要に束縛されて居つた場合とは違つて、生徒の方では餘計に智識を得て居ることになるのである。それから生徒が自分の修めて居る事が、すべて有益にして價值あること、又その學問が已に知つて居るか、或はこれから少しくその概念を得やうとして居る實世間より、甚しく超越して居ないことを、絶えず感じて居る間は、事

生徒の餘計な知識を得て居ることに計る

語學を習ふ目的

外國語教授の最高目的

實最もよく學問にいそしんで居る時代である。

さて吾々が自國語でも外國語でも、それを學習するのは、他人の思想を巧みに手つ取り早く理解することが出來、能ふべくんば又他人に吾々の思想を知らせる手蔓を得んがためである。さうして若し吾々が自國語によりてよりも、外國語を通じて、如何なる智識を餘計に得ることが出來るかと云ふ問題を考へるならば、外國語教授の最高目的は、恐らく外國人の至醇なる思想及制度、その文學、修養——即ち約めて云ふと、廣義に於ける國民の精神を了解する點に存すると云つてよい。併しながら同時に記憶すべきことは、一躍してその目的地に達することは出來ないことと、又その途中にも採り用ふべき價のあるものが深山あることである。日本人の場合で云ふと、吾々が自分の國語を學ぶのは、單に近松や馬琴の作物が讀めるやうになるためでもなければ、又靴屋に靴の修繕を吩咐けたり、洗濯婆の書付けを仕拂つてやる爲めでもない。外國語の場合でも同じ事で、極端に地上を離れて高く翔ることも、又その反對に極端に

miserable. Elisabeth, have you seen Philip? Are we at London?

奇怪な叙

上文に就て考へて見ると、話しをして居る人は、場所と云ふことに關して、奇妙な感覺を有して居る。第一、彼等は自分は巴里に居るが、併し一人か二人かその邊は分らぬが、兎に角話しの相手は、倫敦に居ると云つて居る(電話でも話しをするのか知らん)。それから文面では、彼等、自身伯林に居つた覚えがないと云ふことになつて居る。而も最後に、自身が今現に倫敦に居るのか居ないかを聞いて居ると云ふ始末である。聞いては居るが、併し次の文章が生憎 Frank, you have brought the stick と云ふのであるから、返事が貰へずにすんだ譯である。

連絡のな
い文章の
例(三三)

それからデンマルクの人が英語を習ふ助けになると思はれる二三の書物を調べて見たが、やはり同断である。千八百八十九年出版のものには、次に示すやうな文章が並んで居る。The Joiner has made this chair. What a fine sunshine! For whom do you make this bed? Which of you will have this box? I should like to have it. Of whom have you got this cake? I am very fond of cakes. I have borrowed a

great deal of books from a public library.

千八百九十三年に第二版を出した實用英語入門の中に、次のやうな文例がある。

連絡のな
い文章の
例(四)

Are the king's horses very old? No; but the duke's carriage is old. Is it older than your friend's?.....Has the nobleman told you the news? No, sir; but the lady has told me the news about the business and the wedding. Why do you not give the negro a house? No, sir; but I can tell you that the German has given each of the negros a pretty little house. Has the lady a knife? Yes, the lady has two knives. Why do you not give the ladies the German's keys to the church? The noblemen have the German's keys.

かう云ふ文例は、殆ど際限なく擧げることが出来る。上に擧げた例は、一つ一つの文章で意味をなして居るから、最も拙悪な種類のものではないのである。併しながらある獨逸語の讀本に「お前は何處に居つたのか」と云ふ問の後へ「私達は此處には居ませんよ」と云ふ返事が書いてあるのを見たが、これに對しては、如何とも云ふべき言葉がない。この本を編纂し

拙劣な獨
逸語讀本
の文例

た人も又、完了過去の使用法を説明する場合に、大層どうも明晰な想像力を持つて居つたものと思はれるのである。それから「お前の本は大形のではなかつた、あなたは理屈がよく分つたか、あなたの馬は老い羆れて居ました」と云ふ文例が出て居るが、そんなら何時この不思議な馬が、老い羆れることを中止したのかと喫驚して自問する次第である。しかし具體的の解答は、書物の中には與へられて居ない。單に希臘神話に見るスヒンクスのやうな、謎の如きあなたの馬は老い羆れて居ました」と云ふ文で、びたりと止つて居る。かの丁抹の作家ゼーレン、キヤークゲールド(Soren Kierkegaard)は、佛國の政治家タレーラン(Talleyrand)が、言語が人に授けられてある理由は、自分の思想を秘めんが爲めであると断定したことを否認して、むしろ人間が何等の思想をも有して居ないと云ふ事實を秘めんがために、與へられてあるものである」と云つたことがあるが、上に述べた種類の教科書も、實際かう云ふ種類のものであらうか。

さてこの單文組織に基づいて出來た教科書の中でも、非常な差別があ

キヤークゲールの言

單文組織に基づいて

出て來た教科書の非
常に異なる別

文例が居る
離れば居る

ることは、勿論是認しなければならぬ。かう云ふ教科書を編んだ人の中には、文法を教授すると云ふ口實の下で、生徒の上に云つたやうな我樂多を授けやうとする考へを有しながら、その我樂多には自から分量の程度があることに氣付かない者があるらしい。又た中には生徒の思想發達の自然的程度で理解が出來、又それによく協ふやうな文章を授けやうと試みるものもある。この後の趣意に就いては、文章と云へば、人間行爲の道德的規矩とか、哲學的の玄妙な理論を云ひ表はすものか、左もなくば、希臘英雄などの逸事の抄物など、思はれて居つたやうな、古い時代から已に引き續いて、その思想が進歩して來て居るのである。然るに近代の良著と稱せられて居る教科書の中にさへも、合點の行かぬ程、文例がばらばらに離れて居るので、例へばある評判のよい書物から例をあげると My brother had not many lessons yesterday. Where had you been? The weather had been fine for a long time. This boy had only been in our house three or four weeks. Has your uncle had many tulips this year? How long had you had this frock? のやうなものが

ある。さうして外のもの、様に分り切つた語言は並べてはないが、併し連絡がついて居ない一事のために、臺なしになつて了つて居るのである。こんな具合に、すべてかう云ふ書物から例を取つて、一々批評を浴びせることは、尋常茶飯事で、誠に易々たるものであるが、むしろ吾々は今進んで、何故にこの組織が久しく勢力を持続して來たかの理由を討究して見やう。この組織を辯護する人は、勿論次のやうに云ふであらう。徹頭徹尾連絡の取れた文例で組織することは、困難なことである。極めて單純な物語でも、澤山な文法上の形式や澤山な言葉があるから、初學者はかう云ふものに一時に押し寄せられて、度を失つて狼狽することになるのである。同じく困難と云ふ中にも、それ／＼順序があるべきもので、即ち教授に資する材料は、先づ至つて平易なものから始めて、漸次六ヶ敷いものに及ぼすことが大切である。さうしてこれは單に連絡のない文章を並べる方法によるより外に道がないと考へられると云ふのが、議論の筋道である。

何故に組織を持続したか
力の久しき組織が
かしの力を長く維持したか

生徒を薫陶すること
の興味を惹くこと
と興味を惹くこと

さてその意見は健全である。併しそれを實施する曉、それがために他の正當にして且つ健全なる教育上の方針が無視されることになる、不健全なのである。元來教育の本旨なるものは、生徒を薫陶することに、ある意義を要求すべきものではないか。併し既に述べたやうに、その意義を求めることは、必ずしもそんなに容易なものではないのである。且つ又生徒の興味を惹くことが大切なことではなからうか。抑も何事によらず、氣分が進んで居るときには、骨が折れるやうにも見えないもので、氣分が快活な時に注意して覺えた事柄は、乾燥無味な事物よりも、すつと確實に人の記憶に残るものである。併し日本人が英國人のステッキを持つて居るとか、英國人が日本人の帽子を携へて居るとか云ふ様な事柄、又マリヤが静子の帯を眺めて居るとか、武夫がヘンリーのサーベルを見て居るとか云ふ様に、日英に通ずる様な文例は、假りに生徒をして文法上物主格の用法に漸次練熟せしめるものとしても、單に餘計なものたるに過ぎないのである。勿論大人は、それによつて何か利益があると考へ

例計な文

生徒は
大抵の
ことは
辛抱す
る

文章に
連絡の
ない連
結を誤
りに陥
り易い
その實
例

れば、その位の面倒は辛抱することが出来やう。併しながら心のどん底では、こんなものは逆も辛抱が出来ないと考へるであらう。又事實さうなのである。語學上の觀察から見ても、辛抱が出来かねるものである。固より生徒は、彼等が尊敬して居る懐かしがつて居る、教師のことならば、大抵のことは辛抱する。又良い點數が欲しい計りに、又左もなくとも、それと同様な不健全な理由に刺戟されて、大抵のことは辛抱することになる。併し乍らそんなことは辛抱しないやうにした方が結構である。余は正しい教へ方をすることも、教授上必要なこと、考へる。が今丁度連絡のない文例の組織のために、悪い結果が生ずると云ふ一つの場合を觀察した。一體文章に連絡がないと、どうしても誇張した傾向に陥り易い、それ計りではない、實際誤りに陥り易いのである。已に前にあげた文例から二三の例證を求めることが出来る。即ち For whom do you make this bed? と云ふのは、正しい英語とはどうしても云へない。又 a great duel of books と云ふのは、a great many of books. の大間違ひである。實際二三の

實世間
に用出
來の文
例

かう云
ふ種類
の文章

文法上の規則を説明する爲めに、唯だ譯もなう八個の連絡のない文章を作る、それも生徒が習つた言葉丈けを使用して作るのであるが、それよりも意味のある事柄を外國語で長い連絡のある文例に書き綴る方が平易である。次のやうな文例は、探せば外に幾らもあらうが、積極的に云へば、誤謬ではないとしても、實際上不可能であらうと思ふ。Tie. Do not tie. Fetch. Do not fetch... Give. Do not give... 今これを思想として考察すると、觀念がまだ云ひ盡くされて居ない、或は半分より示されて居ない。又これを言語として判斷すると、甚だ疑惑を挟むべきものとなるのである。元來 Do I take? など云ふ文章は、物體と時間とに關する必須なる報告を要求するもので、かう云ふ文章の斷片は、實世間では決して聞くことが出来ない種類のものである。

さて又かう云ふ種類の文章は、言語とは全體どう云ふものかと云ふ問題について、又異なつた言語の間に存する關係について、全然誤まつた概念を生徒に與へることになるのである。どうも生徒は言語なるものは、

生徒の抱
き易い考
へ

個々獨立した言葉の集合したものであると云ふ事、又自國語の中に今習つて居る外國語の新らしい單語に照應する言葉があるべき筈だと云ふ印象を得易い傾向がある。それから別にこれと云ふ眞面目な目的がある譯でもなく、唯だ在來の規則に従つて、何年か前に流行した謎のやうな鹽梅に、かう云ふ言葉を押し出すのだと云ふやうな考へを抱くのである。それでこんな具合に生ずる誤謬を、スキート氏は數學的誤解と稱して居る。それは言語が丁度單位の集合したものゝやうに考へられて居るので、唯だこの際加數と因數との順序が、非物質的な點丈けがちがつて居る。だからして言語の中でも、自から熟語的部分は必ず暫らくこれを取り除くやうになるのであるが、これは單純な言葉や文法上の規則丈けでは組立てることが出来ない、さう云ふ不合理な熟語的文例が、而かも屢々最も缺くべからざる説明になることがあると云ふ事實に思ひ及ばさない結果である。その文例と云ふのは、例へば英語で *What's the matter? I couldn't help laughing. Serve you right.* 佛語で *Ça va sans dire. Ça y est. Voilà qui est drôle.*

然語的開
例を等閑
に附しな
はらぬ

文字通り
の翻譯は
危険であ
る

獨語で *Wie spät haben Sie? Wer ist jetzt an der Reihe? Wie sind dran. Was ist denn Los?* の如きものである。英人が丁寧 *ring the bell* と云ふ所を、佛蘭西人は簡單に *Sonnez* とやつて了ふ。なほかう云ふ例は他にも幾らもある。生徒が若しなる丈け速やかに、さう云ふ種類のことを澤山習ふことをしないで、何年も何年もはや文法上の法則が悉皆呑み込めて了ふまでも、數學的種類の言葉の塊を翻譯して計り居ると、その結果、さて愈々自身で文章を綴る場合になると、思ひついた英語の句の一語一語を取つてそれをこれから話さうと考へて居る國語に文字通りに翻譯することになるのである。 *Ich konnte nicht helfen zu lachen* と云ふ滑稽な文章があるが、かう云ふのを聞くのは、全く上のやうな學修法の結果である。

言語教授上大切な役目をするのは文法である。ある毛色の變つた教師が、次のやうな報告をしたことがある。「一學年間に語の活用をすまして、動詞の第三類まで漕ぎ付けました」で文章と云ふものが存在して居る理由は、單に文法上の練習にあてる點丈けに價值があるのである。故に教

科書を読むと、屢々佛蘭西人はひどく組織的な人間で、今日は未來の形
計り使用するかと思ふと、明日は定過去の形ばかり使用する。それから
甚だ連絡のとれて居ない事柄を話す、それと云ふのも、唯だ偶然會話
の主題になつて居る時法で、一人稱も二人稱も三人稱も使用することが
出来るためばかりで、接續法などは中々用心して、使用しないやうにし
て、來年まで延期するやうな國民だと云ふ感じを起させるのである。
さて文法に精通せしめる目的で、全體の組織を編んだ處で、上記の如
き極端に組織的な練習方法では、遺憾ながら決して効果をあげることは
出来ない。生徒の方ではある練習問題に使用すべき言葉の手がかりを得
て、これを機械的に用ゐることはするが、それを他の場合に適用する方
法を知らない。故にもし大過去を使用すべき問題に、突然未來形を適用
しなければならぬやうな場合があると、未來形が大過去に近似して居る
やうな疑ひが起り易いのである。それから佛蘭西語で見ると第四活用の
語尾變化の稽古ばかりして居つた所へ、偶然第三活用の言葉が這入つて

來ると、今迄慣れて居る第四活用の臭味を少しも加へることなしに、正
しい活用をさせることは甚だ困難である。余は曾てある獨逸の學校長が
書いた教育上の論說を読んだことがある。即ちその人は、教科書に澤山
下らないラテン語の問題が書いてある理由は、生徒が唯だ一つの面かも
同じ文章に、文構造上の法則を種々適用する必要があつたためであるこ
とを發見した。若し出來上つた文章が、何れも唯だ一個の文法上の現象
を包有するに過ぎないと云ふと、生徒の作文力の程度が、直ぐ知れる便
があるのである、と云ふやうに書いてあつたと思ふ。これは實際さうで、
實世間に例を引いて見ても、娑婆の苦勞が、一時に來て呉れるやうに出
來て居ると、甚だ氣樂な次第であるが、さうは行かぬやうなものである。
前に叙べたやうに、熟語的の語句は、一向顧みられない有様である。
さうして外國人の作つた文章は、積極的に誤謬を見出すことは六ヶ敷い
かも知れないが、大抵はその國の人が、綴らうと思つても綴るやうなこ
とのない種類のものである。英語の教科書中の佛蘭西文や獨逸文は、大

抵その國々の人に見せると眞實を傳へて居ないに極つて居る。これは外國で出版になつた英語入門などの中にも、英國人に見せると、非難をうける點が多々あるのと同じ事である。

言語の熟語的要素と密接な關係があるのはその文體の特徴である。而してこの點に於ても、又今日の教科書は、甚だ拙劣を極めたものである。何故かと云ふと、單に高尚な文章とか、或は特に詩歌の形式にのみ使用すべき言葉を、日用語と十把一からげにして、初歩の初歩時代から、生徒に對して、これが使用を禁制してないからである。茲に一人の外國人があつて、英語を習ふ希望を有して居るとすると、先づ最初悲しみと云ふ言葉ならば、*grief*とか*sorrow*を使用するがよい。*woe*など云ふ言葉とはなる丈け近付きにならぬ方がよいのである。もし然らずして *It was a great woe to me* など云はうものなら、すぐ人の物笑ひとなるのである。それから *unwilling* は *loth* よりも *wash* は *lave* よりも *lonely* とか *forsaken* は *forlorn* よりも必要である。併しリストフ (*Listov*) の英語讀本の初めの方に、これは

文體の特

言の選擇

あまり用
ゐる語句
や言葉

初學者に
ありふに
れたる言
が外に用

もと初學者のために書いたものであるが、それに *I hid him so* と云ふ文章が見えて居る。此は全く古い形式で堅苦しい。それに文章語で *I told him to go, I asked him to go* 或は *I ordered* 云々の如き例の代りに用ゐたものである。それから矢張りその本に、普通よく使ふ、缺くべからざる *enemy* の代りに *foe* を用ゐてある。それから數種の英語入門では素直な *begin* を使用せずして、始終木で鼻を括つたやうな *commence* を使用して居る。同様に毎日使ふ *buy* を捨て、置いて、滅多に用ゐない *purchase* を引き出して居る。—でこれに就ては、余は種々考へて見たが、日常使用する必須缺くべからざる言葉は、不規則な活用や語尾變化をするから面倒だと云ふので、これを除外するのであらう。どうもその外には思ひ付きがない。

抑も初學者は唯だ日常最もよく使用する言葉を活かしさへすれば充分である。故に詩歌や、すつと高尚な散文に使ふ單語などは、何の用にも立たない。そんなことをすると、記憶に重荷を負はせて、肝心かなめな言葉と親炙することを妨害することになるから、餘計な上に却つて有害

である。それ計りではない、學力が進歩して大家の名文が讀めるやうになつた晩にも、初學の時から極り切りの散文と、日常の會話との文句の傍ら、文學上の語法を習ひ來つたのであるから、詩や高尚な散文の語法上の現象を正當に咀嚼することは、彼にとりては出來ない相談である。併し文語に屬しない言葉の中にも、最も必要な言葉を容れてやるために、どしどし延期せらるべきものが澤山ある。その最も必要な言葉は、少しも躊躇することなく、常に自由に使用することが出来るやうに、肚に入れて置かねばならぬのである。ゴールドシュエミット (Goldschmidt) 女史の繪畫的教授法は、今日では大部分その郷里丁抹以外で使用せられて居り、評判もよく賞讃も受けて居るが、大體に於てそれだけの價值はあると思ふ。が、それに例へば、婦人の衣裳の種々な飾付けの言葉が、五十八以上並べてある。それから臺所と云ふ標題の所に、四十六語あり、就中茶罐、篩、瀝袋、手柄杓、柄杓、ふきん、流しの溝、印の入物、泡杓子、漏斗、杵、麻梳、わさびおろしなどが出て居る。それを見た時、余は今

ゴールドシュエミットの繪畫的教授法

要りませぬ言葉

日迄かう云ふ言葉を教へてやると云つて、余を苦しめた人が一人もなかつたことを感謝しないわけに行かなかつたのである。恰かも巴里や他の場所で、巧みに佛語の會話をやるやうな心地がし、又丁度かう云ふ術語を少しも知らずに澤山の佛蘭西の本を讀んだやうな氣持がした。併しこれに反して、もし余の知つて居る單語が、ゴールドシュエミット女史の繪の一つに限られて居つたなら、とてもさう巧みに會話も出來なければ、よく佛語を讀むことも出來ないに違ひない、これは余の確信する所なのである。

又通常文法を取扱ふ場合にも、何の用もない言葉の數々を習ふことになつて居る。この適例は *louse* (蝨)、佛蘭西語では *lou* と云ふと云ふ言葉で、英國や佛國の最も低脳な生徒でもこれを知らぬものはない、誠に適切な言葉である。その理由は、*lou* と *louse* との複數形が偶然にも普通の形式に外れて居る點に存するのであつて、若し言葉の活用が普通の形式と異つて居れば、所謂完全に學修すると云ふ立場から、これを習得する必要

文法を取扱ふ場合の何れに用いられる言葉の數々を習ふことになつて居る普通の形式に外れて居る

があるからである。それで吾々が學校でラテン語を習つた時に *Vis, Vin...* とか *sitis, sitim* で充分なのに *amissis, ravis, sitis, tussis, securis* の如き、又普通 *fovis, pelvis, puppis, tresis, turris, securisa* のやうなたはごとを學ぶ必要があつたのである。それから支配者、嗚聲、手綱のやうな意味のある言葉は、吾々がラテン文學を讀んだ時には、出て來なかつたと確信する。そんなわけで、それから長いたはごと朗讀を行つたもので、この際瞬きもせず *amnis, axis* 云々と流暢に云へるのが誇りだつたのである。が、それを吾々が全く會得して了ふには、勿論各人が多少の時間を割愛して骨折らなければならなかつた。その中の *scrohis, sentis, torris, vecis* の如き言葉は、少なくとも吾々には全く不必要であつた——もし何か不思議な機會で、讀誦中その言葉の中の一つに出會すると、その言葉が長いたはごとの中に加はつて居つたと云ふことは確かに思ひ出したが、さて何故に加はつて居つたか、又その意味はどうであつたかと云ふことに就ては全く忘れがちであつた事實を離れては、殆ど全く不必要だつたのである。がかう云

たはごと
の朗讀

たはごと
は殆ど全
く不必要

スキート
の云つ
て居る
例外の
外方除

ふ機會は千に一つで、當面の文章を理解しやうと云ふ場合に、その言葉が男性かどうか覺えて居た所で、何の所詮もないことであるから、結局大した違ひはなかつたのである。その言葉の中のあるものは又女性であると附け加へるのも、聊か愉快かも知れぬ。古代ローマ人は今日のラテン語の先生が彼等を想像して居るやうな、始終大した學者ぶる人間ではなかつたのである。スキート氏は、その實用的言語研究 (Practical study of Latin) の百十頁に、下のやうに記して居る「獨逸文典を學ぶ時に、先づ *Hornung* と云ふ語彙から初めた。これは二月と云ふ意味の男性名詞で *ingo* に終る名詞は女性であると云ふ規則の例外として教へられたものである。それから長年の間 *Putschhaft* と云ふ封緘の意味の語彙を除いては、以上の言葉程私と親しいものはなかつたのである。その *Putschhaft* と云ふ語彙とは、やはり同じ頃又同じ方法で近付きになつたのである。併し近頃出來た獨逸の書物には、どんなものにも、上の二つを見たことがない。會話の際には尙ほ更ら聞いたこともない。 *Hornung* と云ふ言葉は今日では、二

三獨逸の方言の中にその餘喘を保つて居るばかりで、全く死語となつて居る。自分が後年中等高等文典をやり出した時に、生れて初めてワルテル (Walther) の鳥さしの詩の中で、それに出くはしたのであるが、併し今日ではそれに就ては全く忘れて了つた。

よく引き出される語彙

外國人のために出來た英文典には、大抵は Carman と云ふ語彙が出て居るが、これは生徒が決して忘れることが出來ない程、大切な役目をして居る。さうしてこの理由は、その複數形が Carman とならないからである。同様に貨幣鑄造の際使用する印型の意味の die と云ふ語彙が、複數では dies となると云ふやうなことも、生徒に對して注意深く懇示することになつて居る。併しながら千人に一人も、かう云ふ性質の語彙を使用するだらうとは受け合へぬ。なほこの事に就ては、下にストーム氏の travail へ語彙に關する所論を參照せられたい。

かう云ふ種類の言葉は、幸にも近年出版の教科書からは、大分除去されて居る。併し勿論なほ除き去るべきものは澤山にあるのである。

第三章 讀本の選擇

上來消極的批判を下したが、今その立場から外國語教授の根本となるべき讀本の選擇に就いて、次のやうな積極的要求を作りあげることが出来ることゝ考へる。即ち讀本は可成的

讀本の選擇に關する六ヶ條の要求

- 一、中の文例に連絡があつて、讀んでその意味が合點の行くやう
- 二、興味があつて精神が籠つて居つて變化に富んで居るやう
- 三、先づ言語の最も必要な材料を含み殊に日常用ゐる語彙の材料を包含するやう
- 四、その語法が正確を得て居るやう
- 五、先づ平易なものを手初めとして漸次六ヶ敷いものへ進んで行くやう
- 六、併し單に文法上平易だとか難解だとか云ふことをあまり重く見ないやう

この六ヶ條に當て箴るやうでなければならぬ。この順序は要求の内、割合に重要なものとか價値のあるものとから列べたものではない。もとさう云ふことは、決定するに困難である。それで是等の間に若し何か喰ひ違ひでも出来たら、これを實地に應用して、調和の取れるやうにするのが、先づ最上策だらうと考へるのである。さてこれから進んで、以上の要素のあるものに就て、一層詳細に論じて見なければならぬ。

外國語の初歩的教授に、連絡のある文章を使用することは、已に論じた所であるが、連絡のない文章から受ける害を免かれやうとすると、一方ではシャトールブリアン (Chateaubriand) のアタラ (Atala) ドイツケンス (Die Kens) のクリスマス、カロン (Christmas Carol)、新約全書、又はシーザー (Caesar) のガリック、ウワー (Gallic War) の如き書籍の害毒を避けることが出来ぬことになるのである。それでさう云ふ書籍を読む時には、生徒は何もかも一時に學ぶことであるから、へこまされて了つて、結局何物をも學ばなかつたと云ふことになり、教師は教師で、絶望してもはや連絡のない

連絡の
文章が
受ける
害を免
れず
るやう
な結果

短かい
文章を
長文に
移す

説話

文章を採用しないことになるので、これは實に屢々あることである。

併しこの二つの極端の間には、無論良法がある。それは初めは至つて短かい連絡のついた文章から始めるので、元來一綴りの文章は、引き延ばすことが出来るから、その便宜を辿つて、漸次長い文章に移ると云ふ仕組みにすればよい。固より文全體を常に一綴りの文章と見做さなければならぬと云ふことは、必ずしも意味して居ないので、文章文章の切れ目は、教科書の切れ目と符合する必要は別にないのである。

説話の如きも、短かい連絡が取れて居る文章ならば、この要求に適應するものである。故にこれは澤山の讀本の中で、大切な役目を承はつて居るのである。去りながらこれとても、全くお誂向きと云ふわけには行かない。殊にあまり多數載せるのはよろしくない。鋭敏な説話でも、一度は面白いかも知れぬが、何度も繰り返すと、實際氣が抜けたやうになつて、外のものよりも甚しく退屈の種になるものである。さうしてその説話に興味を持たせる要素でも、これを教授の目的から見ると却つてそ

多數の
説話を
連続し
て出て
来る結
果

の説話を遙かに價値のないものにして丁ふ、即ち説話はその本質上可成
的少しの言葉を含むしなければならぬからである。併し初學者にとりて
は、少しく廣く潤色することを得て、最も必要な言葉や句が、屢出て來
るやうにした方がよいのである。若し多數の説話が重複して出て來ると
云ふと、思想上全く異なつた方面に屢、飛んで行くことは、免かれ難い所
で、随つて又語彙上全く違つた方面へも急に移行行くことになるのであ
る。これが面倒を増す種で、その結果一度習つた言葉も云ひ表はし方も、
速かに忘却して了ひ易いのである。落語に基づいて居る説話の如きは、
互に類似して居る言葉を充分に理解して居なければ、全くこれを噛みこ
なすことは出來ない。而して生徒がそれを會得することは、至つて稀な
のである。外國語の教授に説話を用ゐる最良の方法は、他の部門殊に叙
事的部門の中に於て、若くはそれに關聯して、説話をして一種の加味物
たらしむる點に存するので、斯の如くして説話中に用ゐた語彙は他の部
門でもよく周圍と調和を保つて行くことが出來るのである。この方法は

外國語の
教授に
説話の
最良の
方法

性質上
叙事的
な文例

動物に關する單簡な物語の中に於て、最もよく施こすことが出來るので
ある。余が英語初學者のために編纂した書物の中に、ジョン、ラボック
(John Lubbock) ローマネス (Romans) チャロル (Tylor) 等の諸氏の手になつた
純科學的の作品から、さう云ふ種類のを少しく採用した。余は特に
自分の心を動かすやうに思はれる本文の一種の例證として、是等を示す
のである(併しその要領を得ることも、それを咀嚼することも、さう易々
たるものではない)。何となれば彼等は自然科學の教授それ自身に於て、
屢々等閑視されて居る事柄に就て、趣味あり會得し易い教授を施し、且
つ同時に有益なる言語材料を、左程勞せず多量に學修する機會を與へ
るからである。性質上單に叙事的で、スキート氏が非常に重きを置いた
やうな文例を使用すると、一層大なる程度に於て、言語の最も必須なる
材料を用ゐることを得せしめ、さうして若干の文章の意味が、自ら明か
になると云ふ利益があるのである。さりながらこんな具合に取扱はれる
ことの出來る問題は、割合に少ないので、即ち先づ最も初歩の天然現象

位である。それもスキート氏がその英語口語法入門 (Elementarbuch des gesprochenen English) に用ゐたと同じやうな巧妙な方法で書かないと、折角澤山著名な事實が、さう云ふ文例の中に書いてあつても、興味が薄らいで了ふのである。

讀本として如何なるものを選択すれば興味があるかと云ふことを決定するには、無論年齢の差異と云ふことを大に考量しなければならぬ。併し余自身も経験し、又多數の教師がその事實なることを徴證したやうに、外國語を初めて學ぶ人が、曾てそれに似寄つた事柄が、國語で書いてあるのを讀んで、面白いと思つたことがあると云ふと、年に釣合はぬやうな讀物でも、それに興味を感ずることがあるのである。故に本文が小兒らしいからと云つて心配するにも及ばない。併し余はこれによりて各國に流行する小兒向きの文學の一種を推奨する積りではない。さう云ふ文學は老婦人就中獨身の老婦人が、小兒がそれを喜ぶと考へて、屢、今度はまた自から進んで多量にそれを作り出すと云ふ始末で、それは乳と水と

年齢の差
異

小兒向きの
外國語の
教科書の

外國語に
移される
話の誘惑
力と具へ
る

の話とか、善良な子供が褒美を貰つたこと、か、いたづら小僧がひどい罰をうけたと云ふやうな談話の一節なのである。老幼を問はず、かう云ふ文學は、嘔吐を催さしめるものであるから、外國語の教科書には掲載を避けるのが上乘だと考へるのであるが、併し又説話學者が集めた文學の他の部門があつて、それは口づから他に傳承され、常に趣味あり且つ常に趣向を變へるから、一方に雄視して居るのである。これらは大抵外國語教授に適用して、成功を収めることが出来る。さうして五六歳の佛蘭西の小供を喜ばせるものが、屢、十歳か十一歳或はもつと大きい英吉利の子供を喜ばせるのである。これ即ち外國語に移されると、話が一種の誘惑力を具へることになるからで、それは不明と云ふこと、常に關聯するのである。

かう云ふ材料や、又國民的傳説に屬しないが、それに關係のある他の材料は、多くは詩の形になつて居る。これは吾々のねらつて居る目的に對して、大に都合のよいことで、この場合には、韻が自然に言葉と抑揚

詩と散文

とを緊著せしめるから、随つて破り難い鎖のやうに、しつかりとそれを記憶することが出来るのである。所が散文風の文章を、ある與へられた形式にあてはめて、鄭重に教へると云ふことになる、甚だ勞多くして且つ幾度も繰り返す必要に會するのである。とは云ふものゝ詩を習ふのは遊戯の如きもので、冥々の裡に會得すべきものであるから、もし技巧を加へた若干の不適當な言葉を交へて作つた詩が初學者に不向きならば、純粹なる兒童文學の短かい氣のきいた自然の儘の詩の方が、却つて勝れて居るのである。併し勿論これらとても、常に清淨な眞珠と限つたわけのものではなく、不相應なると、下らぬ言葉、古ぼけた言葉の斷片、或は初學者に無用なものもあるから、これらは多くは排斥すべきものである。例へばヒエトル氏やデール(Dorr)氏が、三人稱にthの附いて居る古い形式や、なほそれよりも古い形式を含有した子守歌を、どつさり英語讀本の中に加味したのは、よろしくないやうに思はれる。若しこの點を取り除けば、あの讀本は出來榮えがよいのである。

本文は平易なのが

讀本の内容

讀本は平易ならざるべからずと云ふ、或はむしろ平易より難解に進まざるべからずと云ふ要求に關聯して、その選定の困難なることは、種々異なりたる條件に基因して居ることを認めなければならぬ。

第一、本文が六ヶ敷過ぎるやうである。元來その程度は生徒の學力以上ではいけない。前に述べたやうに、極初めには、その年配の人に適當であらうと思ふものよりも單簡なものを採用するがよい。それで讀本の中の大部分は、固より常に平易な文學から取ることにして、本文の了會と云ふ點に意を注いで居りさへすれば、事實上何等の面倒を惹起すやうなことはない。しかしそれに附け加へて、近世語教授の際に、上に述べた場合に於けるよりも遙かに大なる範圍迄、幾分の眞面目なる思想を加へなければ理解の出來ない事柄、廣義に於ける自然科學や、人類關係上の論說、政治上の議論等を講讀しなければならぬ。大抵の教師は、餓死せんとするものに食物を與へるやうな、最も下劣な内容を有して居る小説文學より外のものを、生徒と一所に讀むことを恐れて居るやうに思は

スチユアルト、ミヤの言

れる。七歳になる余の一小伴侶が、曾てその母に對つて『坊は譯の分らぬものが一番好き』と云つた。かのダンテが『人は神経を引きしめるにあらざれば幸福でない』と云ひ、スチユアルト、ミヤが、その所説の中に『出来ないことをしよと云ふ要求を他人から受けない生徒は、出来ることでもない』と云ふことを云つたが、丁度この場合、小兒の云つたことが、それらと同じ思想を云ひ表はして居るのである。いかなる教育にしても、平易に失しない問題によつて、生徒を鞭撻する必要があるのである、言語教授の第一歩では、語學上本當に難解な點に就て、可なりいろ／＼の問題が生起して来る。それから後になると、讀本の内容に關する問題が厄介で、それには生徒が自力で、それを咀嚼することが出来るやうなものをあてがはなければならぬ。それから時には又、言葉は甚だ平易で、而かも意味が六ヶ敷い拔萃文の如きものを選ぶのも良策であらう。殊に改定案に據りて教授する場合には、本文は必要上從來よりも一層重要な部分になるし、平易な文例でも、純粹なる語學上の熟練を積ましめる手

言語教授に於ける讀本の選定

語學に關する難易

段として、種々の方法で、効果のあるやうに適用せられることになるから、猶更のことである。

語學に關する難易の如きも、種々の條件に基因するものである。發音の困難なものは、その儘に貯めて置いてはならないので、極の初學者のためには、選擇上特別に注意をしてやることが肝心かなめである。ある教師は生徒が自分の國の言葉に出て来る發音で、殆ど又は全然發音することが出来る語彙から著手することを試みて居る。ところが大抵の場合に、この方法は外國語と自國語との發音の類似を大袈裟に云ひ現はさうとして、而かもそれが出來ず、結局失望を招かしむるに過ぎないが、その事實は先づ暫らく措くとしても、この主義は最も危険な結果を負はせる程度の不體裁に導き易いのである。生徒は第一課からして、外國語の舞臺に居ると云ふ至つて明白な觀念を有し、而して外國語の發音は勞せずしては學修することが出來ないと云ふことも實地に知らしめなければならぬ。併し發音の困難なものを、あまり多く續けたり、六ヶ敷く組合

先づ一級
からの言葉
初め

せたりしてはいけない。それで先づ一級りの言葉から始めるのが最上策であるが、併しこれは必ずしも嚴格にやり通す必要もない。さり乍ら余は單に發音の困難と云ふことは、格別重大視しない。初學者用の佛語讀本の首章に、二三發音の六ヶ敷い言葉があるが、その困難なるが爲めに、折角巧く出来て居るその章を除き去ることを勧め度くはない。どの道、生徒は早くも學修中の言語の發音に慣れ、出来ることならすつかり呑み込むやうにしなければならぬ。それで余が今發音の困難と稱するのは、眞實六ヶ敷いものを指すので、文字の紛れ易いことが原因になる場合のやうな、表面丈けの困難ではない。英語の *pear* と *pair* とを發音することは、何れにしても獨逸人に取りては面倒である、が英語の *scarce*, *fatigue*, *victuals* 佛蘭西語の *ent*, *pupille*, *pitie*, *balbutier* の如き言葉を發音する時、出くわす困難は、余が後に述べる統一的發音符と云ふ萬能藥で除き去ることが出来るのである。

なほその上に語學上の困難は、新奇な言葉を使用し過ぎる點に原因し

所謂發音
の困難と
云ふ意味

新語はな
しに少な
くする

て居るのである。而してその學力の程度の如何は措いて問はず、兎も角此點に於ける最良の方法は、新語は可成的少しにすると云ふことに存するのである。ゾラ (*Zola*) やドーデー (*Daudet*) の小説の中に術語風の云ひ表はしが、どつさり積み重さねてある頁を讀む人は、誰でも出来るだけ注意して讀んでも勉強しても、すべての新しい言葉と親しくなることが出来ることが直ぐ分る。丁度拔萃文を讀む場合と同じことである。又同様に *Pléiz* の組織的單語集 (*Vocabulaire systematique*) を學ぼうと志すと、それには非常なる勞苦と長日月とを要するので、而かも忘れる段になると、驚く程速かである。併し讀書する場合に、新しい言葉が、割合に間を置いて折々出て來ると云ふ鹽梅だと、次が出て來る迄に、前のを頭腦で消化することが出来る。それでその中間の文章は、ほんの讀者が知つて居るやうな事柄を記して置くやうにすれば、さう云ふ文章が新奇な事柄の種を蒔かうとする土壤に、肥料を與へることになるのである。それで假令十でも二十でも新奇な言葉は、これを五頁の中に散在せ

新語はし
らして少
ない出

有益な言
挿入する
若干

しめた方が、十行の中にごたくと押込めるよりも容易に且つ心から呑み込ませることが出来るのである。それからなほこの外に、その間々には別に文構造の説明をさせずに、有益な言葉を若干挿入すると云ふ脚色にすれば、その五行を読む者は、十行を読むよりも、外國語の性質を熟知する機会を餘計に有すると云ふ利益があるのである。皮相の見では、長い文章を読むと、徒らに時間を浪費するやうであるが、事實さうではないので、語學によりて得た資本が、その時利子を生んで、その又利子が殖えることになるのである。

既に叙述したやうに、五個の絶対に必要な言葉を習ふ方が、二十五個の大して必要もない語を習ふよりも勝つて居るから、教科書の編纂者が、それを再版に附する場合に、抜萃文を大部分訂正し、生徒にとりて語學上の價值を有して居るものは、普通あまり用ゐられず又珍奇に過ぎるやうなものを犠牲に供して迄も、これを採用すべきことは勿論その義務である。それから教科書の本文はよいにしても、その用語が不適切なため、

五個の必要
な言葉が
對する間
習ふ方が
二五個の
必要もな
い語をも
勝つて居
る

教科書の
用字が不
適切なら
ば

文學的言
句を必要
な言句を
省略する
必要なら
ば

吾々の目的に副はない場合には、短縮したり註解したり種々都合よく改作したりして、教育上實施せしむべきものとすることが屢々出来る。説話學者が蒐集した多數の國民的説話は、もし人ありてそれを書いてある方言から翻譯する勞を取るものがあれば、これを用ゐることが出来るのである。エウイング(Ewings)夫人の Jackanapes の如き優れた小説は、獨逸や瑞典の學校で、現に時々讀まれて居るが、余の考へでは、文學的語句や不必要な言葉があまり澤山で、幼稚な生徒には容易に了解が出来ない。それで余は自作の初歩讀本に、その中の文章を選んだが、それには數ヶ所若干の省略を施し、次の例に示すやうに改訂したから、體裁は全くすつと俗語的直截的になつたのである。即ち例へば *having ceased to entertain any hopes of his own recovery* の *having ceased to entertain* を *given up* と改め、*Tony tumbled off during the first revolution* の *during the first revolution* を *before he had gone round once* と變へ、*And what bright eyes peeped out of his dark forelock as it was blown by the wind* の *peeped* 以下を *he had* と切り縮めて了つたやうなも

文章は了
解すべき
ものであ
る

のである。この改訂を加へたものを原文に照らすと、色彩が幾分失はれたかも知れないが、余は唯だそれによりて、生徒の得る所は大であらうと主張するのである。文章は單に讀むべきものではない、了解すべきものである。随つて言語は生徒の精神的資産となるべきものであると云ふことが若し大に主張されると云ふと改定案の見解も茲であるかくの如く改訂を加へることが、一層必要になるのである。生徒の學力が進歩すれば、教科書は追々文學的になつても差支へないことは、明白な事實であるから、それやこれやの種々な理由で、そのやうに短縮したり改作したりすることが、果して適當か否かは、一層の疑問となつて來るのである。

さう云ふ改訂の見本として、重ねて説話の一部分を示して置かう。第一は初學者用の本に掲載してはいけない例(併し外國人用の英語讀本の中に見えて居る例)、第二はスキート氏の名著の中にある例である。

改訂の見
本の

(A) His table, however, is constantly set out with a dozen covers, and served by suitable attendants, who, then, are his privileged guests? No less than a dozen of favourite dogs,

who daily partake of my lord's dinner, seated very gravely in armchairs, each with a napkin round his neck, and a servant behind to attend to his wants. These honorable quadrupeds, as if grateful for such delicate attentions, comport themselves during the repast with a decency which would do more than honour to a party of gentleman; but if by any chance one of them should, without due consideration, obey his natural instinct, and transgress any of the rules of good manners, his punishment it at hand.

(B) Every day he used to have dinner laid for twelve guests, besides himself, but no one was ever invited to the house. Who were the twelve covers laid for then, do you think? For twelve dogs. Each dog had a velvet chair to sit up in, and a napkin round his neck, and a footman behind his chair to wait on him. The older dogs always behaved in the most gentlemanly manner, but it sometimes happened the one of the younger dogs forgot his manners, and snatched a chop, or a piece of pudding off the plate of the dog that was sitting next to him.

文法上の
問題

最後に面倒なのは、文法上の問題である。舊來の教授法を墨守して居

る教師は、かう云ふ面倒を最も恐れて、本文の意味や連絡を、殆んど悉皆無視して了つても、むしろ文法上の組織的進歩を破壊しない様な手段を取つて居る位で、一例をあげると、Writeの如き形式はto write, I write, you write, he writes等の變化を習得した上で、初めて手を附けることを許されて居るのである。でその主義は、これらの形式は、連絡をつけて學ぶべきものだ云ふことである。併しすべてそれを反語的に云ふと、この『連絡を附けて』と云ふ言葉は、あらゆる連絡を斷ち切りて學ぶと云ふ意味になつて居るから、随つて結果に於て殆ど何等得る所がないのである。生徒がその讀本に出て來る形式を『理解する』やうに要求せられた場合を詳細に觀察して見ると、これは例へば同じくhe writesと云ふ形式でも、一人の生徒はそれをwriteの三人稱、單數、現在と云ふことによりて理解し一人は又唯だI write, you writeの如き形式によつてこれを理解するとか、又menは單數manに屬する不規則の複數形であると云ふことによりて理解されると云ふやうなことを意味するに過ぎないのである。約言すれば、

連絡を附ける
と云ふ言葉

理解の仕方

連續した
文章に移

『理解する』と云ふことは、茲では問題になつて居る形式が、文法上の如何なる組織に入るべきものかと云ふことを知る點に存するのである。而してそれら幾多の形式は、文法の中に列べられてある順序と同じく、例へば現在を過去より先きに教へると云ふやうにしなければならぬ。けれども初學者はすべてこの組織で、何か利益を得るものであらうか、これは考へものである。でさう云ふ意見は實施はされる、實施はされるが、結局矛盾した形になつて居るのである。なせかと云ふと、詞論に關する問題がすつかりすめば、今度は連續した(改訂された)文章に移るのが普通になつて居る、それでcouldの如き形式が出て來るのであるが、併しそれによつて生徒が知ることを得るのはそれが接續法だと云ふ位のもので、接續法が何故に用ゐられて居るかを知らずには、一二年はすぐかゝつて了ふのである。自分の考へでは、文章法が詞論よりも必要でない云ふ理由が何處にあらう。文章法上の現象や詞論に關係のある形式を教へるよりも前に、それらに應ずる文法の説明になるやうな文章を教へた方が得

策で、かくしてこそ矛盾を惹起さすにすむのである。さりながら吾々が幾らかは矛盾をやることは免かれ難い點と思はれるから、何も殊更に迂遠な方法を取る必要がない。換言すれば、極めて最初の文例では、不規則の形式を用ゐてはどうかと氣にかけるに及ばないのである。

文法上の不規則を教育の眼で見ると、全く異なつた二つの場合に分れるのである。がこれは恰かも關係があるものゝやうに得て思はれ勝ちのものである。第一、どんな言語にも不規則は幾らかあるが、出て來るものが至つて稀であるから、交際上でも又文學上でも、最も重きをなさないものである。それである言語を使用する人が、長い間隔を置いて、不規則形を用ゐる際には、普通最もよく注意を加へるものである。何故かと云ふに、その言葉を話す人は、その云ひ表はし方の固有の形式が何かと云ふことに就て、曖昧な觀念を有するに過ぎないからである。併しかう云ふ不規則形は、文法に收容されるから、一人の文法學者がその中の一つに眼を着けて置けば、すべて次々に出て來る文法書にも、その内容を

教育上の不規則を見れば

不規則形を收容する

外國語の文法を合書するに便し

完美にするために、注意してこれを記載することになるのである。一體自國語に就ては外國の文法學者の方が、自國の人々よりも、一層さう云ふ點に注意する傾向がある。その理由は、根が自國語でないから、彼等は稀有な例、普通な例に關して、本能的感情を有して居ないからである。大陸に用ゐられて居る英語文法書に、今日でも I catch, I dig, I shine, I write の過去形として I catched, I digged, I shined, I writ を載せてある。又ある書物には、二個の異なつた動詞として、I weel, wil (或は wot) 及びその過去形 wot、それから I wize 及びその過去形 I writ を記してある。さてかくの如き陳腐な非實用的な形式を入れることが、甚だしい誤謬であることは、その自國語によりて最もよく判斷することが出来るのである。所がその英國人自身が、自分で書く佛蘭西語や獨逸語の文典の中にも、上に述べた英語の誤謬のやうに、よくない事柄がある。余が學校時代に佛蘭西語の travail の複數に就て、次のやうな規則を學んだ。travails の意味が宰相から王への上奏又は秘書官などから宰相への申達を示すことになる、複

ストーム
氏の批評

數の *travaux* を用ゐる。又悍馬に靴を穿かせる時、制御に使用する機械を意味する時も同様であると云ふのである。この規則はストーム氏が次のやうに批評した『これ迄佛蘭西の書物は無數に讀んだが、余の記憶の範圍内では、近代文學の中で、*travail* と云ふ語彙に出くわしたことは一度もない。これは確かだ。報告と云ふ意味では、マダム、ド、セグイネ(Mme. de Sévigné) の中に見えて居る。』と云ふところがある教育のある佛蘭西人に、この言葉がさう云ふ意味で用ゐられる場合があるかと聞いた所が、今日ではもはや使用せられないやうだと答へたことがある。故に言葉は既に久しき以前から、近代の文法書には全く姿を見せないと思ふであらうが、又しても絶えずに入り込んで居るものと思はれる。

併しながら、この第一類の不規則を處置することは極めて平易である。それには教授する際に、可成的根本的に、さう云ふ例を除去しなければならぬ。曾て大抵の教科書に對して施されたよりも、遙かに大なる範圍迄、根柢からこれを絶滅しなければならぬ。近年かう云ふ方面に於て、

可成的
根本的に
不規則を
除く

不規則
變化を
教へる
時期

若干の運動が行はれたことは、是認しなければならぬが、なほ大にこれを実施するを要するのである。併し同じ不規則でも、他の種類の、例へば至つてありふれた言葉、即ち *is, was; can, could; go, want* の如きものになると、これとは事情が全く違ふのである。かう云ふ不規則を生徒が習ふ、それも遺漏なく習はねばならぬ——と云ふことには異論はない。唯だ如何なる時期に於てあるか、規則變化に入らない前か、それともそれを了つてからか、と云ふのが問題である。大抵の教師は後と答へるであらう。組織的文典では、先づ正則な普通な應用の廣い規則で説明の出来る例を挙げ、それから初めて除外例や、他に見當らない現象等を説明することになつて居るが、それは正當である。けれどもさうかと云つて、生徒が同じ順序で、種々の形式を呑み込まなければならぬと云ふ理屈はない。そんなことをして何程の利益があらう。恐らく語學に關する理論的智識をうる上で、幾らか利益がある位のものであらう。併し一方この方針を實施したゝめに招いた損害は、勿論遙かに大である。何となれば不規則

何れの意味も離れず、
列の盛んな
れに用ゐる
るわらけ

不規則か
利益へ
ら興へる

變化の言葉が必要で、それを使用しなければ都合のわるいやうな本文を並べることが、絶対に不可能だと云ふことが分るからである。かの何の意味もない離れくの文章の行列が盛んに用ゐられると云ふのも、元はと云へば除外例を直かに採用するために、非組織的になると云ふことを恐れる結果である。吾々が初等教授のために、よい本文を得やうとするには、先づ正則なものを要求し、除外例は後廻しにしようと思ふ主義から脱却するより外はない。なほその上に、若し正則の例から始めると、生徒が類推的に、その規則を除外例に属する言葉にまで適用するやうな危険を醸さぬとも限らないのである。これに反して不規則では、形式そのものが他と大に異なつて居るから、さう云ふ誤謬の生ずることを防ぐことが出来る。英語で複數を作るのに、語尾にsを附けることを習つたものは、mans, childsの如き形式を作り出さぬとも限らないが、複數形のmenとchildrenを習つた場合に、それを手本にして他の言葉を變化せしめるやうな傾向に陥ることは少ないのである。併しかく云ふ精神は在來の

自然と云
ふことが
吾々の嚮
導者

不規則は
語構成上
の偶然の
出來事

方法を轉倒して、組織的に先づ除外例から學修せしめやうと思ふ考へではない——この場合に於ても、又自然と云ふことが、吾々の嚮導者とならねばならぬ。恰かも人が子供の耳に這入る位の所で談話をして居る際に、自分達の云つて居る言葉が正則か變則かを考へやうなど、はししないと同じやうに、外國語の第一讀本を選定したり整頓したりするのに、さうひどく氣苦勞するにも當らない。何でもよいものならば、それを選び、さうして形式はその儘に取るがよい。それでこの位の程度の所では、下らぬ贅言を費やして、文構成上に於けるこれらの形式の地位を説明するやうなことも、しない方がよい。云ひ換へると、不規則な形式は恰かも語の構成上に於ける偶然の出來事であるとやうに教へる必要があるのである。若し讀本の初めに Once there were a king and a queen と云ふ文章があるとすると、この際 there were は『居つた』の意味だと云つて置けばよいのである。there has been に對する形式は、それを使用すべき必要に會した時に及んで、教授すればよいのである。それから教師が、この初めの文例へ立ち

初歩の規則に於ては、
 代形を不規則の時
 につては、
 利便を置くに
 たいして、
 なたつて後につ
 るに於ては、

戻つて、生徒をして曾て習つたこれと關係のある形式を想ひ起さしめるやうにすればよい。佛蘭西語の初學者には *penx(eau)* と *pen(little)*、*taire (make, do)* と *fer(iron)* の相互關係が六ヶ敷い(併し或は易いと云ふ人があるかも知れないが)。一方が正則で、一方が變則だと云ふ區別があつた所で、それは何にもならない。實際 *deesse* の如き不規則の複數形は、デンマーク人にとりては、却つて正則の *loes* よりも易い。これは *loes* には *z* 音があるためである。これと同じ理由で、英國人が獨逸語を學ぶ時、不規則な比較級の *besser, best* の方が、正則の *aisser, aissert* よりも學び易いのである。追々學力が進歩して、文法の一層組織的な研究に立ち入る時代となれば、至極の初歩の時代に、既にある『除外例』が出て來たことが、むしろ好都合だつたと感ずることゝ思ふ。即ちその初歩の時代には、除外例を見ても、別段不可思議なものとも、稀有なものとも感せずに通つたからのことである(この説全體に就ては、余はスキート氏に同意することは、これで分ることゝ考へる)。

文章は簡明に於ては、
 文章に於ては、
 簡明に於ては、
 文章に於ては、
 簡明に於ては、

けれども複雑した文章構造に基因する文法上の面倒な問題は、初學者には授けないやうにしなければならぬ。それから文章は最初から、出来る丈は一樣に簡単に明晰に作成することが大切で、かの同格獨立句の如きは、唯一とは云へないところで、少なくとも有力なる文章上の一形式であるから、これを使用するのがよろしい。例へばラテン語の第二學年に、その一年間、ラテン語にあてゝある時間の量が、二學年又は三學年に、近世語にあてゝある時間に匹敵することになつて居るが、假令二學年でも、生徒にシーザーの間接語法の長い文章を読ませることは、當を得たものではない。さう云ふ文章は、生徒の勞力が進歩して、同じ事でも即席に突き出された時、それを易々と理解の出来る位になる迄は、示してはいけないのである。これ又上にあげた提案に従つて、讀本の本文を改訂しやうと着手する人にとりて、正に留意すべき要點である。

第四章 讀本の使用法

以上は讀本の選擇に就て述べた——さてこれからは、教場で讀本を使用すべき方法に就て論じて見やう。

余が學校に入學した當時、語學上の問題は、大抵一からげに、その場へ引き出されたもので、この事は今日と雖も、ただ明瞭に記憶して居る。而して余はこの教授法が、多少變化の法則の影響をうけては居るが、今なほ諸地方で行はれて居つて、全く滅亡しないことを不思議に思つて居るのである。先づ復習が行はれるのであるが、その時は文章を音讀せず、それを流暢に翻譯が出来るやうにならなければならぬと云ふ要求だから、可成的少しの時間でやらなければならぬ。それから今度は、新しい所を教はるのであるが、その時一人の生徒が起立して讀本を少し許り讀む——淀みながら讀む、行き止つたり、種々の非美學的な *Hum* とか *ay* の音が出て、爲めに一語一語が分離されることになる。それからその間々に

余が入學當時の語學教授法

教師の合の手

教師が訂正したり、さあ早くとか、ひどい發音ぢやないかとかの前の G はどう發音するのかとか、私が發音するやうにすれば分るぢやないか馬鹿なとか云つて、途中が幾つにも切れるのである。それで生徒の方でも暇さへあれば、一體この次に來る語は何と云ふ意味であらうと云ふこと計りを考へて居る。それがすむと、今度は翻譯で、その時も教師が訂正したり、御覽なさいとか、動詞は何處にあるかとか、併しその格は何の格かなど、合の手を入れるのである。次には何か文法上の問題になる、すると教師は一二動詞の主要なる活用を述べ、接續法の用法を説明することになつて居る。教師の質問は、その御國辯でやるけれども、その返事は外國語でやらなければならぬ習ひだつたのである。先づそれで一通りすんで、今度は次の生徒が指名されて、同様に練習することになるのである。こんな風に、その日課がすんで了ふまで、一人一人繰り返すのであるが、若し時間が澤山餘つた場合には、今一應前から繰り返すことになつて居つた。併しそれには急いでやる必要があつたから、今度は

返事は外國語

初めそれを讀む時に、一々立ち止ることをやめたものである。それから最後の五分か六分を利用して、次回の分に目を通したもので、教師がそれを翻譯すると、生徒がその跡を追うて紙の上をつけ廻し何か六ヶ敷い言葉でもあれば、その意味を讀本の隅か雜記帳に書き記さうと一所懸命になつたものである。

それでその時代では、教育の最も顯著なる特色は、急速と云ふことであつたのである。何分にも仕事は澤山あつたから、殊に試験前は別してさうであつた。それから點數が翻譯の巧拙によりて決定されると云ふ習慣が出来上つて居つたやうに思はれる。それだから讀本を出来る丈け何度も繰り返したもので、これは翻譯の練習を積ませるためなのである。それから音讀の時間はあまりなかつた。その理由は唯だ發音の主要なる精神丈け稽古すれば、普通どんな言葉でも、綴りによりて發音を類推することが出来ること云ふ點にあつたので、殊に獨逸語ではその傾きがあり、又佛蘭西語でもさうだとせられたものである。教師がある文章を音讀さ

その時代は急速と云ふことが教育の特色であつた

この教授法の批評

せた揚句に、始終それを三度か四度か外國語に翻譯させる方法を取つたのも、今になつて考へて見ると、この邊に自ら信する所があつたからなのである。

さてかう云ふ教授法では、生徒がどれ丈け外國語を聞くことが出来るか。今一例を挙げると、生徒が間違つた翻譯をすると云ふと、教師は時あつて一言云ふ。併しその時生徒はその發音を注意しない。のみならず教師が云ふのは、普通一言言葉だけで、それも生徒の國語で書いた文章の中に最もよく出て来る語を話すのである。一體發音の巧妙な人でも、佛蘭西語に他國語の言葉が伴つて出て来る時に、佛蘭西語に固有なその佛蘭西的特色を會得することが出来ないことは事實である。元來二國語が發音の基礎を異にして居るから、一時に一方から他方へ移ることは容易ではない。故に生徒が教師から聞くのは、唯だ僅少である。勿論學友からは、もう少し餘計に聞くが、併し學友等の發音は正しい模範とすべきものではないし、それを聞くことも格別興味がないから、注意もしない

のである。それで他の連中が読んで居る所を追つて行くことが出来さへすれば、その間他の事を考へて居つても差支へない。例へば次の文章の六ヶ敷い言葉を調べるとか、左もなくば、切手蒐集の仕事か、自轉車のことを夢みて居つてもよいのである。それから二行計り音讀を許されることも稀にはあつたが、これは當面の主要なる仕事、即ち翻譯へ行く案内の一種と考へられて居つたに過ぎない。こんな具合に、生徒は讀本の中にあるものゝ外は、決して外國語を話す機會を得ないし、他人が讀むあとをつけて行つたところで、讀本にない字を云ふのを耳にすることは殆どないのである。

故にさう云ふ教授法が、その國の人が速かに自然の儘に話すやうに、外國語を理解しやうとする生徒の能力を發達せしめないことは、怪しむに足らない。若し生徒に外國語の至つて簡単な日常使用する文章を、正しく自然の儘に發音するのを聞かせてから、唯だそれを繰り返させたなら、十中八九までは、ひどい錯誤を暴露して、とても充分な發音は出來

この教授法の缺點

なほ他の不利益

ないのである。ところが讀本の中にあるものならば、それよりも遙かに六ヶ敷い文章でも、少しも骨が折れないのである。

併し唯だそれ丈けではないので、この方法にはなほ他に不利益がある。外國語が澤山生徒の眼前を疾驅して過ぎる。それを假令ひ朦朧たる方法で、いよいよから、認識することが出来るのが、生徒の主なる目的で、かくしてこそその翻譯に端緒を與へることが出来るのである。そこで何か特色があるので諳誦して居る文章を、全部翻譯しやうとする場合に、さう云ふ風に不確實に記憶した一つの言葉でさへも、その端緒となることが間々あるのである。生徒が手を入れて居るのは翻譯である。それで原文の冒頭を一寸見れば、全翻譯文が胸に湧いて來るのである。併し時には頁の同じ位地にあつて左方の頂きとか何とかそれを見慣れて居る際に限ることもある。故にその際には、外國語の文章の形式を明確に記憶する必要はない理窟になるのである。茲に一つの實例がある。それは普通の方法によりて教授された伶俐な生徒を捕まへて、先づ讀本の中の一つ

實例、その一

實例、その二

翻譯が主目的の特長を了すべし、未だいは

の短文を翻譯させて、それから本を閉ぢさせて、さてその翻譯文の原文を云へと命じて、大抵の場合それは云へないのである。余は千八百八十六年ストックホルムに開かれた學會で、これに關する一個の例證を報告した。一人の伶俐な生徒が、余の面前で、メリメー (Mérimée) のコロンバ (Columba) の一節を翻譯したのを實驗した所が、巧みに出來て居た。彼はその翻譯文を充分によく記憶して居る様子であつた所が、いざ佛蘭西語で云ふ段になつたら、愚圖々々して且つ骨を折つて *Et il pleurnait comme le fils de Pietri pleurnait* と云つた。しかし書物には *Et il pleura comme pleurnait le fils de Pietri* となつて居つたのである。かるが故に、もし出くわす佛蘭西語の形式に殆ど注意しないならば、定過去と半過去との根本的差異或は語の順序に關して、正しい觀念を得ることは固より不可能である。故に翻譯を主なる目的とするやうでは、まだく眞に外國語の特色を了會することは出來ないのである。

生徒が自分の讀む番になつて、例へば *Cet homme, dont elle ne voyait jamais*

翻譯の實例

言葉の排列が變る

Les enfants の如き文章を翻譯することになつたとして、その生徒の精神活動を暫らく觀察しやう。 *Cet* はこの、 *homme* は人間、 *dont* はその人の――茲まで來て彼は若し佛蘭西語の順序に排列すると、英語でないやうになるからと氣が付いて、急に見廻して、そゝくさと一語一語を調べ、最後に *Les enfants* (小兒) と云ふ語を發見した、いや忘れて居つたぞ、英語では、この場合には、冠詞をつけてはいけないんだ、だから唯だ *children* として置く、それから後戻りして *elle* (彼女)、この時 *ne jamais* を冒頭に持つて行かなければならぬことに氣が付いた、次には *voyait* (見た) と云ふ順になる。故に佛蘭西語をその自然の順序 1、2、3、4、5、6、7、8、9 に置かずに、前後をはね廻つて、それを 1、2、3、(8)、9、4、5、7、6 の順序にした結果になつたのである。獨逸の學校で使用する英語の教科書の中に、翻譯のためにと云つて、次の如き文章を載せ、數字を註して、英語で用ゐられて居る語の順序を示して居る(この文章は英語研究第八卷、百七十五頁に引用してある)。
Würden Sie nicht viel Zeit gehabt haben

即座に獨
習を要す
る人

翻譯者必
考へる必
要のある
問題

wann Sie nicht jenen Brief zu schreiben gehabt hätten。どうかすると、生徒自身が、さう云ふ数字や符牒で、翻譯の困難を軽減することがある。即座に獨逸語を翻譯する習慣の人は、如何にするかと云ふと、從屬句の主格を翻譯してから、こつそり次の方に目を通し、どうかすると、數行見て取つて、動詞を探さうとするのである。英語では動詞は主格とあまりかけ離れて居つてはならないので、それを持つて來ると云ふのである。それから一語一語を急いで調べながら、常に若干の從屬的思想に注意して居るのであるが、一方主要なる思想は、依然存在して、待ち合せて居るのである。上掲の簡単な文章を見ても分るやうに、一文章中の單語が、兎も角も各々英語の原語にそれ／＼對應することは至つて稀であるから、この精神的活動は一層複雑になる譯である。通則として、翻譯者は又、次のやうな問題を考へる必要がある。例へば sich は茲では him か her か himself か herself か itself か oneself か、この中どの意味になつて居るか、is は is の意味かそれとも es か if か、il fait は he does, he makes, he has (something done) か又

翻譯時
の活動
以上
の能力
を以て
ある

は il does か il va か、それともなほ他の意味に譯すべきものか等の如き即ちこれである。この精神的活動は通常想像するよりも遙かに複雑なるもので、小兒の能力以上である。故に彼等は屢々半可通でもすつかり呑み込めても、教科書や兩親や教師の翻譯で満足するに止まるのである。なほ又翻譯は、語の形成といひ節といひ云ひ表はしといひ語の順序といひ、これらは皆英語の肌になつて居ないから、英語に對するむき出しの侮辱だらけになつて居る傾きがある。教師は固より King's English を殺害することを堪へ忍ぶことは出來ないから、外國語の課業の大部分は、かう云ふ蠻的行爲を除去する仕事に費やす必要があるのである。

これ即ち外國語の教授は、常に同時に自國語の教授であり、又あらねばならぬと云はれる理由で、又一層皮肉に、外國語學修の主たる目的は、自國語に就て正當なる智識を得るためであると云はれて居る理由である。若し吾々の目的として居ることが、言語を理論的に了解することならば、この後説に大なる眞理が籠つて居るのである。何となれば、もし吾々が

のだと云ふ一般の思想をひどく疑ひ、むしろその反対であると考へて居つたのである。なほ又スベンサー氏の事實と批評 (Facts and comments) の百七十頁(千九百二年版)にも、これと同じ事柄に就て、手厳しい論鋒を差しむけてあるから就て見るを要する。

外國語の良き慣例を直覺する力を得ることに就ては、茲では論じない方がよい。英語や佛蘭西語や獨逸語の云ひ表はしの習慣を、真底から知り抜くことは、全く異なつた國語、例へば日本語に翻譯したものに直ちに注意を轉じないで、これらの外國語の中にあるものを觀察することが出来ない間は、云ふ迄もなく、とても不可能である。『生徒の精神は全く不可思議な操練を行はなければならぬ。即ち絶えず二つの言語の間をあちこち跳り廻り決して休息することがないのである。これは他の種々の事柄を理解することは卓越したる練習となるかも知れないが、さしづめ言語を習ふ上で、利益があるかどうかは疑はしいのである』ガベレンツ氏の言シラフハハイツェンシャット、第七十三頁、千八百九十一年版。吾々は外國語の成分と、『點頭

ガベレンツ氏の説

外國語を教へる第一條件

翻譯は何故重要なものが

き合ふ近付き』になるに過ぎない。即ち見る上では、彼等をよく知り、その名を繰り返すことが出来るが、彼等と全然懸意になることも、彼等と共に生活することも出来ない。彼等の肉も血も、自分等の肉や血にならない。抑も何か六ヶ敷いとを學ぶ折には、それに力を注ぐことが、根本的に必要である。故に外國語をよく教へる第一條件は、生徒をしてなる丈け多く、外國語を取扱ひ、又それを働かせる機會を與へる點にあると思はれるのである。彼はその中に漬つて了はねばならぬ。折々その水沫をかけた貰ふ丈けでは、仕方がない。その水中に没頭して、自ら得意の壇場に入つたと云ふ感じを起し、かくして巧妙な水泳者として、その中で嬉戲するやうにならなければならぬ。併しながら有力なる方法の最大特色なるものは、翻譯とそれに伴ふ手間で、澤山の時間が潰れて了つて、それがために外國的要素を自由に咀嚼玩味する時間の餘裕がないことである。然らば何故に翻譯は、しかく重要なものであるか。吾々は先づこの問題に對する返事を得、それから進んで然らばそれは左程重要視せずとも

よいのか、或は重要視すべきものでないかを研究し、更に然らば如何にしてこれを第二に置くべきかの方法を質問しやう。さて翻譯する能力は、外國語教授の目的と考へられるかも知れない。或は翻譯が單に教授上の唯一或は數種中の一手段と考へられるかも知れない。

凡そ外國語教授の目的は、生徒をして流暢に正確に翻譯することを學得せしむるにあると云ふのは、果して正當な見解であらうか。余はこれに答ふるに、力強き否を以てしなければならぬ。この問題を熟考しないものとか、自分の精神活動を充分に注意しないものとかの間に行はれる一般の輿論は、畢竟外國語を理解するには、唯だ自國語に移すより外に道がないと云ふのである。所が事實さうではない。外國人の書いた作品を原本で読んで、而かもそれによりて眞に裨益を得る人は、次へ進む前に、先づ一々の語を翻譯することはしない。況して一々の文章又一々の句切れなどは猶更のことである。佛蘭西語の講義を聽いて居る人や、巴里で芝居を見て居る人などは一々自國語に翻譯するやうな餘裕がない。

外國語に對する理解は、
自國語の語彙を以て、
移すに依りて、
外語の實情を、
云ふに足らざるを、
外語の法則を、
是れと爲す。

外國語の意味は、
自國語の語彙を以て、
移すに依りて、
外語の實情を、
云ふに足らざるを、
外語の法則を、
是れと爲す。

併しそんなことは、しなくてもすむのである。さうして實際巧みに、佛蘭西語や獨逸語やを話す英國人は、先づその文章を英語で組立て、それから生徒が問題を翻譯すると同様にそれを翻譯するやうなことはしない。これは申す迄もないことである。いや、すべてかう云ふ精神活動では、英語が背景で、ある場所を占領し、さうして例へば余が佛蘭西語を讀んだり話したりするとき、獨逸語が贅物など同様に贅物となるのである。甚だよく知つて居つて、書物に出て來ても特別に注意もせず、會話には少しも躊躇せずの使用の出來ぬやうな外國語の語彙や語句の意味を、人に聞かれることが屢々あるが、それに對應する英語の言葉を、ある薄弱な不確實な解説の力を借らずに答へることが出來ない。それから長く考へ込んだ揚句、忽焉として正確な英語の云ひ表はしにぶつつかるのである。また質問者が、初め先づ一問題、次に一問題と、佛蘭西語やラテン語の翻譯を提起することがあるとする。吾々はどうも満足は出來ぬが、さりとて初め云つた答案以上のものを出すことが出來ない。そこで彼は

新たに暗示を企てる。さうすると忽ちそれが最もよいと云ふ考へが、吾
 吾の上に閃めくのである。かう云ふ場合はすべて外國語の云ひ表はしは
 明かに分つて居るが、それを翻譯することが出来ないものである(又翻譯す
 ることが後になるのである)。勿論英語の *fall* は日本語の落下とか、死亡
 とか、低音とか、或は衰へるとか、出生するとか、傳はるとか、果して
 その何れに譯するが最もよいかと云ふやうな使用法に就ては、何等顧み
 るを要しない。又 *against* と云ふ言葉に出くわすとしても、對して、備へ
 て、逆つての中、どの意味になるかと云ふことを決定するために、殊更
 ら躊躇することはしない。又 *remain* の場合でもさうで、残る、續ける、
 宿する、堪ふる等の中のどれで譯すべきものか否か、そんなことは問ふ
 ところではない。それから又 *he spilled his own saucer, he took after his father,*
he pulled a long face のやうな熟語が出て来る度に、實際適當な譯語を捜さ
 ねばならぬものだらうか。分り切つた英語の文句に一々引つかゝつて、
 この方こそ反つて翻譯する必要が間々ある煩雜な日本語の譯語を發見す

翻譯する
 必要がな
 ると思は
 れる場合

る迄、考案を廻らす必要があるだらうか。否、余はすべてかゝる場合に
 は、自分の思想を直接に且つ随意に外國語に結び付けて、これによつて
 彼を云ひ表はす方法を探り、殊更に自國語を通じて理解するやうな迂遠
 な手段によることはしない。日本語にきつちり同じやうな言葉がないと
 か、少なくとも一時それを思ひ出すことが出来ないために、外國語を日
 本語へ導き入れる人はこれによりて次の事實を談つて居るのである。即
 ち人は自國語を通じて、その意味を理解せずに、外國語の言葉を學ぶこ
 とが實際出来、又さう云ふことは屢々あるものであると云ふことである。
 佛蘭西語で *Il trouva la pauvre fille dans un état à faire pitié. On a voulu trouver*
dans ses oeuvres un pessimisme de parti pris. Pour lui, il y allait de la gloire de cette
maison qu'il servait depuis sa jeunesse. の如き、又これに似寄つた他の澤山の文
 章は、誰でも易々と理解することが出来るが、併し翻譯せよとなると、
 忽ち躊躇して了ふのである。吾々は全體國語に明るくなる能力と、國語
 から外國語へ、又外國語から國語へ翻譯する技倆とを區別しなければな

自國語に
 明らくな
 る技術と
 巧譯の技

らぬ。この二つの技倆は、一人而かも同一人に存在する計りでなく、別別に人を異にする場合も、少なくないのである。若し自分のことを云ふことを許されるならば、余は次のやうに云はう。余が速かに且つ巧みに翻譯する能力は、余が學んだ外國語を理解したり、それによりて自分の思想を發表したりする能力よりも確かに劣つて居る。即ち余の翻譯上の技倆をして、語學上の智識を判断せしめることを欲しない位である。

ハマー
ン氏の言

近頃物故した藝術批判家ハマートン(P. C. Hamerton)氏は、趣味津津たる French and English の著者であるが、自分のことを下の如く云つて居る。『余の妻は巴里人で、自國の古典文學に對して、強烈な趣味を有して居たから、余は佛蘭西語では、彼女の生徒となり、その代り英語では、彼女が自分の生徒になつた。吾々は日常の會話に、その何れの語なるに關せず、誤謬を訂正せずに見過してはならぬと云ふ一つの規定を作り、而して吾等は互に相手に對つて澤山の文章を音讀した……いろ／＼の外國語を使用する場合に、余はむしろ稀だと思はれる一の能力を有して居る。それ

は、全然彼等を個々に離して見ることの出来る能力である。佛蘭西語を話したり書いたりする時、余は暫らくの間は、全く英語を知らぬものゝやうである。何故かと云ふと、英語の言葉が浮んで來ないからである。さうして余は重量とか容積とか、金錢とか、晴雨計とか、そんな語さへも、一國語から他國語へ翻譯することをせず、唯だこれを個々別々に考へるのである。』

この場合、ハマートン氏が、この能力は稀であると云つたのは、勿論彼が有して居つたやうな、高い程度で稀であることを意味して居るのである。十八度と云へば、華氏寒暖計でどの位の熱度だと、正確な觀念を抱くことは、恐らく誰でも出来るものではない。併し無論これとても習慣になれば、溫度を度盛りで示すことをよく注意するものには、全くわけもないものになるのである。これ恰かも佛蘭西へ行つた外國人が、程なく無意識に佛貨を數へ出すと同じ事で、さうなると最早や deux franco ein-
quante を英語のシルリングやペンスに換算する必要がなくなり、隨つて

習慣

物價が高いとか、安いとかを判断することが出来るのである。

しかしこの外國語に明るくなると云ふ能力を大いに有することは、あまりないことで、之は尤もな次第であるが、僅かばかりならば、別に稀有のことでもない。随分これを有して居る人があると云つてよからうと思ふ。ある程度まで外國語の書物が讀める人が讀んで居るものを理解するために、六ヶ敷い個所は別として、他は全く自國語に翻譯しなければならぬと云ふことは、通則と云ふよりもむしろ除外例と考へる。さうして面倒な個所によつゝかつて、意味を了解するには、自國語に戻す必要がある場合にも、調査を要とする言葉は、通常一つか二つに止まるから、彼等は態々そこに立ち止つて、さう云ふ言葉の出て來た句を全體翻譯することも、ましてその文中に包含されて居る文章上の構造を解剖することなども、これを試みないのが普通である。ある國民が皆常に二個の言語を用ひなければならぬ例があるが、這般の事情はルザツィヤ(Lusatia)のウエンド(Wend)人の間に見るのと同様なることは、疑ひを容れない。こ

普通外國程
に明瞭な
語彙を有
する人は
力居る人
は澤山あ
る

二個の言
語を話す
國民の例

の人民はウエンド語と獨逸語とを同じやうに流暢に話すが、普通民に一方から一方へ翻譯しろと云ふと、大抵辭退する。『彼はそれが出來ない』或はわが報告書の口吻を借りて云へば『それを恐れて居る』のである。併しウエンド語で聞いた話しを易々と獨逸語で繰り返すことが出來、それから又同様に、單語を正確に翻譯することも出來るのである(千八百八十九年、ライプツヒ版、ポオレ(Polle)氏、國民の言語に關する感想如何(Vie denkt das Volk über die Sprache?)の第三十五頁に『この二つの言語は、英語と露西亞語との差異程ちがつて居るのである』と見えて居る)。

速やかに外國語を理解する能力を欲する人が無數にあり、且つその思想を外國語で云ひ表はすことを要とする人の數が、兎も角も絶えず増加しつゝあるのに、翻譯術を練習する機會を得る人は、實に極めて僅少である。英國人で見ると、獨逸語などで私信を書く人は澤山あるが、彼等は先づ英語の本文を綴ることをしない。實際は自國語で書いたものを、後に正確に翻譯するのが順序なのである。それから他人に事務用の手紙

翻譯術を
習得する
人は至つ
て少くあ
る

を外國文で書く必要のある人でも、その手紙に書くべき語を一つ一つ與へられる譯でなく、單に内容の大ざつばな輪廓だけに過ぎないのが普通で、それに全力を傾むけて、外國語の衣裳を着せるのである。それで所詮は、法庭に關係して居る僅少の翻譯者、翻譯小説の供給者及び詩を外國語に翻譯して詩的のものに移植する美事な魔性の技術と摺み合ふ元氣のある見あげた人が、至つて僅かばかり残つて居る。けれども翻譯が巧妙であると云ふのは、根本的には、吾々すべてが必要とする言語を直ちに會得する點に存するのであるから、彼等はこの事實によりて、自ら慰むることが出來やう。故に吾々が翻譯の巧妙なることを以て、あらゆる言語教授の目的と認めることを拒んでも、彼等はそれで不満足を感ずるには當らないのである。もとく、例へば、英語の *light* や *low*、佛蘭西語の *montre* や *fin*、獨逸語の *hor* や *haben* の意義を知るには、先づ彼等が現はれて居る語句を了解する必要がある。故に言語はそれを翻譯するに先だつて、了解して置かねばならぬ。

翻譯が巧
ふこと云

外國語研
究上の理
想吾々

吾々の理想を云へば、外國語に、其國の人がそれを使ひこなす程度に出來る丈け近く接近することである。即ち言葉でも文章でも、其國の人に於けると同じ様な思想を吾々に起さしめる様になることである——さうして吾々の熟知して居る様に、この思想は國語中の之に對應する言葉によりて生ずる者とはちがふのである。元來國語間の關係と云ふものは、數學上の等價の間の關係のやうなものではない。佛蘭西語の *Coeur*、獨逸語の *herz*、英語の *heart* は、すべて同一の地面を蔽ふものではない。佛蘭西語の *sens*、獨逸語の *sinn*、英語の *sense* の間に、各差異のあることも勿論である。語の上の意味は、假令同様と云つたところで、語と聯結して居る觀念が、國語によりてちがふので、その觀念は、關係のある言葉とか、音韻上又は他の點で類似して居る言葉とか、或はある種の言葉が屢々繰返されて、ある文句に現はれることによりて形成せられるものである。同じ動物でも、英語では *bat*、佛蘭西語では *Chauvesouris*、獨逸語では *Hohlermaus*、ラテン語では *Vespertilio*、デンマーク語では *flagermus* と云ふのであるが、しかしその觀

同一の意
味は、語
を現し
て、語
と聯結
する
観念は
語に
依り
て、一
つに
な
り
な
い

念には、果して如何なる差異があらう。佛蘭西語や獨逸語やデンマーク語などは、動物が鼠に似て居る所を捕まへ、デンマーク語では、この外になほそのばた／＼やる運動にも眼を著けたのである（この觀念は、獨逸人には消失して了つて居ることは Patteren が Holten の代りになつたためである）。併し佛蘭西語は、その赤裸々な形狀を注意したものである。ラテン語は、吾々をしてこの動物が外出して居る時刻を考へさせるのである。けれども英語の Lat はむしろ何等の暗示をも與へない、抽象的説明である。而して吾々は、詩聖テニソン (Tennyson) が、方言的言辭の Latte の方が Lat よりも詩作上の用途にあてゐるのに適して居ると云つた理由を了解することが出来る。言語のかう云ふ『低音』は、掛け言葉とか詩などでは一層明らかに響くのであるが、しかし彼等はなほ常に吾々の意識の背景に潜んで居るのである。以上の如く、すべてかゝる事情がある上に、ある外國語では語法又は意義のある個所の差異を注意して區別するのに、他の國語では、さう云ふ點は、何等の關係もなく、反つて全く異なつた點に

如何なる
譯でても
完全なる
原型を全
體に再現し
るべきもの
を再現時に
めはたさな
い

使用する
場合の使
用される

於て精細を極めると云つたやうなわけで、その外なほ言語の順序に關しては、全くちがつた習慣があるのであつて、かう云ふ理由のために、如何なる翻譯にても、曾て完全に原型を再現せしめたものは、決してないのである。

すべてかう云ふ理由よりして、吾々が外國語教授の目的とする所は、翻譯乃至翻譯に巧妙になることなどに存しないのである。

第五章 種々の教授法

以上述べたやうな理由はあるが、併しなほ翻譯なるものは、言語教授を実施する上で、有益にして缺くべからざる手段である。この問題に就て判断を下すために、吾々は翻譯が使用されることが出来る、又事實使用されて居る種々の場合に就て、明晰なる觀念を有しなければならぬ。

第一、外國語を國語に翻譯することは、生徒をして外國語を理解せし

むる方便で、例へば Horse は馬のことであると話してやるとか、彼のために全文を翻譯してやるとかするのである。

第二、外國語を國語に翻譯することは、生徒が理解したかどうかを試験する手段である。例へば余が生徒に Horse は國語で何と云ふかと聞くとか、生徒に全文を翻譯せしめるとかするのである。

第三、國語を外國語に翻譯するのは、生徒に外國文で何か書く練習を積ましめる手段である。

第四、國語を外國語に翻譯するのは、生徒が云はんと欲する意味を、外國語で現はすことが出来るかどうかを試練する方便である。外國語の文法上の規則を了解して居るかどうかを試験するために、生徒をして國語で書いた文章を翻譯せしめるのは、この方法の一分科である。

さて第一と第二、又第三と第四とが、實際密接の關係を有して居るとは明白である。けれども一般に疑ひなく信せられて居るのとはちがつ

て、一は必ずしも他を豫想するものではない、このことは後になれば判然とするであらう。

在來の方法を辯護するものは、第一、第二、第三及び第四も共に區別を立てずに、これを放擲し去り、翻譯はこれらを超越して、而して實に唯一の實習的方便なりと云ふかも知れない。

さりながら又この一派の人士に反對する者は、これらの四つの中の何れの場合に於ても翻譯は唯一の手段ではないと主張して居る——唯一の手段どころの話ではない——なほその價值は場合によつて異なつて居るのである。

第一、翻譯には常に危険が伴つて居るにも拘はらず、ある場合には、生徒に理解させるのに、最も確實な捷徑として、この手段を使用し、その他の場合には、この方法を用ゐずに試みやうとする人が澤山ある。中には又生徒をして外國語の意味を會得せしめるために如何なる機會にも、翻譯とはちがつた、又それよりも勝れた方法を使用することが出来る

翻譯するに
用はするに
値はするに
異はするに
居るに
なつて
居るに
なつて
居るに
なつて
居るに
なつて

考へて居るものさへあるのである。

第二、生徒が外國語を理解して居るかどうかを試験する方法として、翻譯を命ずるのは、可なり良い方法であるが、併し唯だ可なりよいと云ふに止まつて、常々依頼すべきものではない。さうして大抵は、最後の手段でなければならぬ。

第三、國語を外國語に翻譯することは、他の今日まで一般に等閑視されて來た多數の方法と比べて見ると、少なくとも初學者にとりて極端に價値のない手段である。上に云つた多數の方法と云ふのは、教師が生徒に外國語で何か云つたり書いたりさせることを云ふのである。ビールbaum (Bierbaum)氏は、その新言語學(Die neueren Sprachen)の第一卷、第五十七頁に次のやうに説いて居る『外國語を學ぶ目的にて外國語に翻譯することは、唯だ教育上の罪惡と混亂との域中に屬する』。

第四、生徒が思想を外國語で云ひ表はすことが出来るかどうかにか就ての試験として、口頭又は筆頭の翻譯を課することは、虚偽なるか、左も

ビールbaum
氏の
言

なければ唯だ學力の進歩して居る生徒にのみ適用すべきものである。

これらの斷案は、特に翻譯に依らしむべき方便が提示された上で、初めて確定せらるべきものである。余は引き続き、この四種類の間の差異を、鋭く觀察することはしない。以下繁々と説明を繰り返す煩をさけるために、『問題になつて居る外國語』と云はずに、單に自國語に對する『言語』として説明しやうと思ふ。

さて何か他に、生徒をして外國語の語彙や文章の意味を會得せしむべき方法があるであらうか。ある。それには先づ、直接觀察或は直接認識(獨逸人がアンシャウングと稱するもの)の手段によりてこれを行ふのである。この方法たるや、教場に現在して居る物品などを表はす名詞に適用するのである。例へば window, door, bank, chair, table, chalk, book, pencil, leadpencil, watch, pupil, teacher などに適用するのである。それで it is (或は that is) the chalk とか that is the black table の如き文章を云つて、それに該當する物品を指示するだけで事足るので、さうすれば生徒が一語一語の意味をとり

直接觀察
法へ直接
認識法)

ちがへるやうなことになるはしない。なほこの方法は、身體に關する極めて必要な言葉、例へば *head, hair, nose, eye, mouth, lip, heart, cheek, ear, arm, hand, finger* のやうな言葉を教へるためには、最良の方法である。併し名詞を澤山教へる外に、他の品詞も若干かう云ふ方法で授けるのである。*here* とか *there* の如き語彙、就中動作を表はす動詞を若干教授するがよい。*I write; Henry writes. I take the chalk. James takes the chalk. I rise up; William rises up.* それで教師でも生徒でも、何かしやべつて居る側らで、教師はその動作を説明すると云ふ方法をとるのである。かう云ふ風にすれば、既に入門の第一步に於て、英語の單語を操つる前に、簡単な國語をも用ゐずに、幾らかの語彙や文章を學ぶことが出来るのである。それで動詞の種々の時法でも、この方法によりて説明することが出来る。例へば若し讀んで行く途中に、生徒が *he has taken* と云ふ語句に出會して、その意味が不明な場合に、教師はそれを説明するために(これは無論極めて初歩の課業には適用が出来ぬ)先づ白墨を取つて、*I take the chalk* と云ひ、次に書物を取

つて *I take the book* それから手を捕まへて *I take his hand* それから一括して *At first I have taken the chalk, and then I have taken the book, and finally I have taken his hand* と云へばよいのである。少しばかりの智慧で、こんな具合に、大なる効果をあげることが出来るのである。さてかう云ふ方法で教師が教へるものを生徒が繰り返すべきものか、又どう云ふ具合に繰り返すべきものかに就ての問題、及び生徒は實際は、これらの言葉を自國語で理解するのだと云ふ異論に對しては、後に説明することにして、茲では唯だこの種の材料をあまり骨折つて取り過ぎないやうに戒めて置かう。最上の方法は、その材料を他の品物と一所に散布して置くことである。

第二に言葉の意味は、間接認識即ち繪畫によりて傳へることが出来る。これはゴールドシュミット女史が、非常なる努力を以て、その『繪畫様言語』や、それと同一の目的によりて出来た他の書籍の中に實驗せられたものである。その出版に關しては、半分は女史、半分は他人の手によつたのである。さてその各頁には、思想の同一方面に屬する物品の一例を示

間接認識
法(繪畫)

す繪畫を集めてあるが、時には彼等が一所に結び付いて全景をなして居るし、時にはまた材料が孤立して存在し、互に連絡されて居ないこともある。ある繪畫は、うまく連絡がついて居る。又あるものは、種々珍奇な事柄を示し、例へば望遠鏡が虹の中に氣隨に徘徊して居るやうなものもある。材料にはそれ／＼目録につけてある數字を記すので、その目録には、相應する佛蘭西語とか英語とかを書いてあるのである。獨逸の多數の學校や、近頃は又デンマークの各地方で、大いなる繪畫の掛圖を、教場の壁にかけることになつて居り、殊にヘルチエル(Holtz)式掛圖を使用するので、それは例へば、冬の畫には冬に屬する最も重要な事物の畫が集めてあるのである。それから教師がこれらの事物の中の一つを指示し、同時に學修しやうとする外國語で、それを説明するのである。なほ又繪畫は、説話的或は叙事的本文を説明するに用ゐることが出来るので、これはサラウオ(Sarauw)氏及び余が出版した英語入門に適用した方法である。

繪畫の掛圖

反對説

この認識法に對しては、種々の反對説が起つた。それでスキート氏はかう云つて居る。この場合、觀念は翻譯の際に於ける程、鋭く表はされて居ない。若し吾々がシルクハットの側(畫の上での話)hatと云ふ語が附いて居るのを見ると、單にその帽子一種類ばかりを示すものか、それとも他の澤山の種類をも示すものか不明である。それで『帽子』と翻譯して置けば、先づ／＼正しい觀念を提供し易いのである。或は教師がもし自分の口を指さして mouth と云ふと、生徒は唇の意味かと考へないとも限らぬ。その他は皆同斷である。

それでこの反對説は、空論家の一哲學者の唱ふる所で、彼は實驗して見もせず、かう云ふのである。元來この方法は、外國語を獨修したり、絶対に繪畫によりて學ばうと試みるものに對してのみ危険であつて、他には殆ど心配がない。

口づから教授する場合には、そんな誤謬は至つて稀で、別に例をあげる程のことでもない。さう云ふ誤りが生じないとも限らぬと云ふことを

教師の心
のつ
けの
一
の
危
な
い
な
法
は
こ
こ
に
は
な
い

明らかにすることは、教師にとりて参考になることかも知れないが——この誤謬は屢々小兒がその自國語を會得する場合にも起ること、大體かう云ふ同じ徑路を正確に踏んで行くのである。若し教師がよくその事項を理解して居りさへすれば、決して誤謬の起るものではない。よし起つたにしろ、速かに訂正することが出来やう。何故かと云ふに、無論彼は單に實物を指示して、言葉を教へるに止めず、直ちにそれを文章及び前後の關係の中に適用するので、さうすればその意味も全く明瞭になるからである。例へば教師が *you have a mouth and two lips* と云ふか、或は唇を指して *lip* と云つてから、一人の生徒に向つて *How many lips do you have?* と質問すれば、そんな誤謬を生ずる危険はなからう。實際教師がその口を指す場合には、單に *mouth* と云ふにとゞめず *this is a mouth* とか *this is my mouth* とか云ひがちのもので、かうすれば、*a, my* などの正しい意味を正確に示すことになるから、すでに至つて初歩の時代から、あらゆる危険を防ぐことが出来るのである。かの *hat* の場合に於ける誤解の如きは、

第二の反
對説

勿論稀有の例ではあるが、さう云ふ場合でも教師は、同じ言葉を使用し、自分や生徒の帽子に就て講話を試み、よりて以てその危険を避けることが出来るのである。

認識法に對する他の反對説は、教師が近世語をしやべりながら、立つたり腰かけたり戸をあけたり閉めたり鼻を撫でたり靴を穿いたり脱いだりすると、教場が騒々しいと云つて非難するのである。

第三の反
對説

第三の反對説では、教師が生徒に *love* と云ふ言葉を教へやうと思つて、その手袋をポケットから取出すと、生徒がそれを見て考へる、その考へるあらゆる心のさゝやきを注意深く抉出してある。『ひどい粗末な物だなあ』とか『あゝさうだ、さうだ、今日は一番上等のを穿めて來たんだよ、かうやつて使ふことが分つとつたもんだから』など、考へると云ふのである。固よりこの方法は、鳥羽繪に崩れて了はぬとも限らぬ。さうして教師が、あんまりこせ／＼して、澤山の動作をやると、教授に締りがなくならぬとも限らぬ。しかし先づ一般に、この方法は、他の英語の時間、或は英

語以外の課目の時間に起るやうな騒々しさとは非常にちがつた、或はそれより騒がしい活動を要としない。即ち生徒が一人、黒板の所へ行つたり、戸の所へ行つたり、窓を開ける位のものである。さうして若し教授に精神が籠つて居れば、生徒は他の學課を受ける時より以上に、役にも立たぬ心のさゝやきに耽るやうなことはしないのである。

認識法の手段による時は、外國語が直接に觀念に結合すると云ふけれども、これは單に皮相な見方であると云ふ反對説があるが、これには以上の諸説とちがつて、大なる權威があるやうに思はれる。何となれば實物の帽子でも繪の帽子でも、齊しく生徒に向つて、直ちに國語の「帽子」を思ひ出させ、その結果、自國語によりて教授せる迂遠な方法を避けたい本來の希望が達せられることになるからである。怪物は吾々と一所に動くのである。もし吾々にして、日本語が生徒の意識に入ることとを全く防ぐことが出来るかと考へてもしやうものなら、それこそ吾々は、確かに自分を欺くのである。併し吾々が若しその要求を讓歩して、唯だ出来る丈

傾聴に値する説

フロイト夫人の教授法

け多く外國語を前景に出し、日本語を背景に置くことを欲するならば、教師や生徒によりて日本語をしやべる必要がない場合には、この希望を達するに相違ないので、これは否定することが出来ない。而して教師も生徒も、この教授法に慣れるに従つて、前に習つた言葉が、一層新らしい言葉と結合されることになり、さうして教師が全體を變ずることが巧みになるに伴つて、日本語が生徒の頭に浮ぶことも、追々稀になるのである。

少なくとも最初の授業がすめば、繪畫を暗示の基礎として、それに記してある外國語で談話してもよいし、又しなければならぬ。その際自國語に依頼する必要は殆どない。さうして外國語で何か聞いたり云つたりすること、時間は全く塞がつて了ふのである。けれどもこれは繪畫が唯だ單語ばかりを暗示せず、その内容の豊富な場合に、初めて最もよく行ふことが出来るものである。故にフィンランド(Finland)のフロイト夫人(Freudenthal)夫人は、教授の場合に、大に風景畫を使用し、かく

して繪畫が暗示する全説話を紡ぎ出す機會を與へるのである。サラウオ氏と余とが、英語初學者用に編纂した書物の中に、物語や拔萃文を加へ、それに一寸した解説を添へて置いたが、あゝ云ふ方法は、一層よからうと思ふ。さうすればもとゞ多少本文によりてなすべき、且つ又根本的に同一の單語で行ふことが出来る會話のことであるから、その物語が導火線となつて、會話をさせることになるのである。それから教師は、又時々前に説明した繪畫に立ち戻る必要がある。さうするとその間に、生徒が進歩した爲めに、前とはちがつて、それよりも遙かに充分に、その繪を取扱ふことが出来るのである。

然る上は、繪畫はその活動區域を重要視過ぎてもいけないし、説明上唯一の方便として用ゐることも出来ないけれども、外國語を教授するには、確かに効力がある。何事にも一面ばかりを見るのは有害である。併しながら繪畫は、外國の土地や人民の特色を示すものでなければならぬ。別して初學の程度以上の者を教授する場合に用ゐるには、猶更のこ

繪畫は外國語を教へるに於ては、
唯一の活動區域を重要視過ぎてもいけないし、
説明上唯一の方便として用ゐることも出来ないけれども、
外國語を教授するには、
確かに効力がある。

學校に備へた繪畫は、
學生の興味を惹くもので、
外國語の教授に於ては、
唯一の活動區域を重要視過ぎてもいけないし、
説明上唯一の方便として用ゐることも出来ないけれども、
外國語を教授するには、
確かに効力がある。

とである。余はゴールドシュミット女史を非難する最初のものではない。何故かと云ふに、女史は例へばデンマークの家屋の應接間とかデンマークの郵便配達夫とかを描いてある繪を示し、生徒をして同じ繪を用ゐて、すべて三つの外國語を學修せしめやうとするのであるけれども、その外國語のあるものは、全く興味を惹くものとは考へられず、反つてひどく單調の感を起さしめるに過ぎないことになるのであるが、而かもこの際の注文は、生徒をして各國民間に存在して居る多趣な特色ある差別に著眼せしめる點にあるのである。學校では、是非とも繪畫を壁間にかけるとか、英獨佛等各國の生活状態、風景、建築物、技術、制度に就て、若干の教化を生徒に與へることが出来るやうな圖解を挿んだ製作品などを具へ付けて置かねばならぬ。外國の繪入り雜誌の如きものには、澤山の有益な材料があるものであるから、教師は屢課業の中、五分間乃至十分間、或は今すこし時間を割いて生徒と外國語でさう云ふ繪の話しをしなければならぬ。これは教科書に基づいた教育を補足するには、蓋し優良

な方法であらう。

併し何もさう云ふ備へ付けの繪畫でなければ、外國語教授に使用する
 ことが出來ぬと云ふのではない。教師は時々黑板に白墨で、粗末な繪を
 書いて、教科書の中の讀誦すべき種々の事柄を明らかにし、外國語で行
 ふ説明をその畫を基本にして試みてもよい。余は僅かに二三度この方法
 を實行したが、生徒は直ちにそれに興味を持つた。で余は甚だ圖畫の手
 腕に缺けて居ることを、その時になつて初めて歎息した次第である。余
 が學校へ通つた頃、等閑に附して居つた學科はと云ふと、圖畫であつた。
 今日では幸にして人々が、第一に各學科の教師の教授上の補助として、
 第二に教育上の見地から考へて、生徒がものを正確に觀察し、繪畫で見
 たものを再現することを習ふことは結構な事であると云ふ點で、この方
 面の必要なることに注意するやうになつた。而して博物學と地理學との
 場合に於けるが如く、生徒の圖畫は、現今にては教育上重要な部門で
 あるから、外國語教授の際にも、同様に重んずべきものである。デンマ

備へ付けの繪畫で
 なくとも
 他の方
 法もある

圖畫によ
 る練習

ルク社會學校 (Det danske skole) で實驗された思想は、立派なもので
 ある。余は千九百年のその報告 (Beretning) の中から、次に引用して見やう。
 『圖畫による練習も又肝要なものである。課業の始まる前に、黑板の上
 に一つの問題を書いて置いて、生徒にめい／＼圖畫によりて、それを説
 明させるので、一人宛にある場所をあてがつてやる。それから獨逸語で
 記載したり説明したりすることが出来るもの計りを描くことを命ずるの
 であるが、勿論その主意は、なる丈け多く描くことに存するので、例へ
 ば若し問題が車だと云ふと、生徒は普通兩方の輻、車の棒、柄、側面の
 部分、坐席、鞭を持つた馭者、馬、馬具等を描く。彼は全級に向つて、
 その圖畫を説明する必要があるから、無論緻密な部分まで立ち入ること
 になるのである。その結果生徒は、何物にても如何なる名稱を有するか
 と云ふことを注意し、教師が彼等に話す言葉を周密に留意するやうにな
 るのである。一級の中、十四人が十分間でその圖畫を書き了ることが出
 來、その十四の圖畫を一通り説明するには、三十分を要するのである。』

ンベック氏)。

茲では問題がデンマーク語で與へられたものと思はれる。さうしてその演習によりて學修された言葉は、その解説があまり微細な點に亙つて居るやうである。余は例へば英語を學んで居るデンマークの生徒には、その問題を英語で充分に口授する方がよいだらうと思ふ。即ち you draw a picture of a two storied house with three windows in each story and one door; outside the house a man is to stand smoking his pipe; とか you draw a carriage and pair, inside the carriage is a gentleman, but you see only the tip of his nose; a dog is running fast behind the carriage. の如き命令を下すのである。若し黒板に充分な餘裕があつて、生徒が數人同時に圖畫を書くことが出来れば——何時でも出来なければならぬが——餘計空いて居る程結構である。他の生徒が一人又は數人で、それを説明するのである。固より教師も生徒も、共に圖畫に洩れた事柄を注意し、新らしい點を書き添へるので、これはランベック氏の提示した通りである。又生徒が曾て讀んだものを理解して居ることを示させる

その方法

ために、單簡な物語に關係のある圖畫を描くやうに請求するがよい。以上余は圖畫の用法に關する話をするために、自分の出發點即ち生徒に外國語の意味を教へる方法(翻譯から離れて)から聊か岐路へ外れた仕誼である。

上に述べた連中よりも遙かに學力が進んで居る吾々は、皆外國語の書物を読む場合に、屢見慣れぬ言葉があつても、前後の關係で意味が全く明瞭な時には、辭書で檢索することを省略することを自白しなければならぬ。そして吾々は皆、自國語を學ぶ際にも、同様の方法で、澤山の言葉を覺えたのである。然らば何故に外國語を教授する時に、この經驗を適用しないのか。そんなことをすると、あて推量をし、學修に不注意になり、近似と云ふ丈で、不確實な理解をするやうになるからいけない、と云ふ返事を吾々は受け取るのである。假りに一步を譲つて、さう云ふ場合があるものとしても、一つの言葉の意味を前後の關係によりて『嗅ぐ』ことが出来、さうして良心ある教師だと、生徒が眞實に言葉を了解して

あて推量

彼等の
推量の
あはれ
居るま
すつて
居るま
すつて
居るま

居るかどうか證明がなければ、満足して居るわけに行かぬやうな文章がどつさりある。それから生徒が直ぐ意味を推量しなければ置けぬと、教師の方で想像する場合がある。而かも彼等のあて推量は、すべて過まつて居るのである。けれどもなほ本文によりて見慣れぬ言葉の意味を尋ねやうとする能力は、價值あるもので、等閑視するには勿體ない、否むしる彫琢を加ふべきものである。さうして之には適當な節制を加へることは勿論のことである。兎に角見慣れぬ言葉の意味を、あて推量をせず、確實に推定することが出来るから、實際自明の文章を使用しさへすれば、何の危険もないのである。There are twelve months in a year. の如き文章で、イタリックで書いた三個の語彙の中、二つを知つて居る生徒は、*January* の問題に於て、二つが與へられてある時は、不明の分量を發見する事が出来ると同じ様に、甚だ明確に第三の意味を論究することが出来るであらう。而して若し教師が *the first is called January, the second is called February, the third is called March* と續けて云ふとする。その時生徒が若し序數詞と月の名稱

とを間違はずに一括すれば、全くあて推量ではないのである。同じやうなことが、次の文章に就ても云ふことが出来る。The day is divided into twenty-four hours, the hour is divided into sixty minutes, and the minute into sixty seconds. Sixty seconds make a minute; sixty minutes make an hour; twenty-four hours make a day; seven days make a week; fifty-two weeks and some days make a year; hundred years make a century.

この場合生徒は教師の翻譯を要せずして、言葉の意味を若干推度することが出来る。故にさう云ふ文章を翻譯させることは、時間の浪費に過ぎない——何となれば彼は格別英語を見ないでも、半分眠りながら、翻譯を行ふことが出来、又さう云ふ方法では、甚だ得る所がないからである。否——生徒をしてかう云ふ文章が流暢に云へるやうに英語で繰り返させ、次にその中から序數詞 *the first, the second* などを離して云はせ、それから月の名 *January, February* それからこの兩方を一所に讀み返させ、最後に *What is called the first month? What is the tenth month?* の如き質問を無暗に出して、

言葉の意
味を推度
する法

細かい區分
から大
きな區分
へ

返事をさせるがよい。それから又月の名を選んだこと、関係のあることであるが、生徒をして時間に關するあらゆる區分を談らしめ、それも先づ最も細かい區分から始めて、大きな區分に及ぼすやうにし、それから How many minutes are there in an hour? How many seconds are there in three minutes? などの質問を出すがい。かくの如くにして、教師は、充分なる自信を抱いて、一つも日本語を示さずに、英語をあまり知らぬ生徒を長い間精出させて置くことが出来る(後に述べる計算の練習のところを参照)。

さてある自明の文章に就て談るべき問題は、勿論僅少に過ぎない。スキート氏は、その初歩讀本の中に、さう云ふ種類のを蒐集したことは、同様の教科書を編纂した余の知つて居る人々以上である。が殆どどの本文を見ても、一般の意味から推して、新らしい言葉の意味を、的確に示して居るやうな文章を有して居ることが分るであらう。さう云ふ脚色の文章を生徒が餘計に胸に疊み込めば、それ丈け彼にとりて結構である。前後の關係によりて意味を推度する能力は、自國語とか外國語の言

似言葉の類

葉に類似して居る點によりて進んで行く傾向よりも、むしろ獎勵すべき、實施すべきものである。假令この後の方法で、數多の語(英語 send 獨逸語 senden 英語 ruin 佛語 ruine を學ぶことが出来ても、類似と云ふことは、屢吾々を欺むくことであるから語源上同一なる言葉の場合にも)これを信用し過ぎることは戒しむべきことである。もとくこの種の眞に價値ある聯想は、大抵はそれ自身の一致によりて生ずるものである。

併しながらなほ引き續いて云へば、新らしい言葉は、單に外國語で説明してやれば充分である。固よりこれは事實上教師が自明の文章の中に、その言葉を挿入することであるから、吾々が上に話した事柄の一部分に過ぎないのである。誰でも大小何れを問はず、常々英語の立派な辭書を使用して居る人は、屢實地の經驗によりて、見慣れぬ言葉が、十二分に説明してある事實を覗ひ知ることが出来たかを知つて居る。然らば何故にこの經驗を又外國語の教授に應用しないのか。例へば Widower 及び Widow を説明して見ると A widower is a man whose wife is dead. A widow is a

辭書の註

woman whose husband is dead となるのであるが、この説明は無論單純なる寡夫及び寡婦てふ翻譯によりて得べきものより以上の知識を含有して居ないけれども、併しこれが翻譯よりも優れた知識を與へる場合がある。多數の英國人は獨逸語 *Kapitalken* の英譯 *primago* 或は *hat money* を聞くと、從前通りその賢さには、變りのないことは、事實であらうが、若しそれを獨逸語で *prämiengeld, das früher dem Schiffskapitän ausser der Fracht gezahlt wurde, ursprünglich freiwilliges Geschenk, dann vertragsmässig bestimmt* の如く説明すると、直ちに會得が行くのである。英語の *dentil* は英獨辭書では *kalberzahn* と翻譯してあるが、余は大抵の獨逸人は、*アナンダーレ* (*Anandale*) の定義 *the name of the little cubes or square blocks often cut for ornament on Greek cornices* とか、*フンク、ワグナル* (*Funk-Wagnall*) の定義 *one of a series of small square tooth-like ornamental blocks in the bed-moulding of the cornices of some Ionic and other entablatures* (これには教訓的説明さへ施してある) とかに據つた方が、得る所が多からうと思ふ。さてそんな術語的言葉で、吾々がそれを云ひ表はす英語の、

翻譯が説明に及ばない場合

この反對の場合

それにあてはまる言葉さへも知らないものは、教場では、大して役に立たない。併し時々言語の偶然の幻想のために、翻譯が説明の如く正確なる思想を與へないことがある。若し余が *stockwerk* が *floor* の意味だと云ふと、*fussboden* としなければならぬ所へ *stockwerk* を持つて來るやうな危険を犯すことになる。けれども若しそれを *eine der horizontalen Einteilungen eines Hauses* とか、それに似通つた説明をすれば、誤解する心配がないのである。これに反して、英語に翻譯した方が、外國語で長い説明をするよりも、必要な知識を速かに且つ明瞭に得ることが出来る言葉が澤山あることは、勿論是認しなければならぬ。さうして教師は場合々々に、生徒が補助としてその方法の中何れを選択すべきかを考へなければならぬ。なほ教師は固よりいつでも、彼に取りて最も平易な翻譯を試みるやうな懶惰の風に馴致されてはならぬ。併し教師が外國語で説明すると、何時でも生徒は、新しい言葉に添へて、教師がその際檢閲する他の言葉もいくらか聞き取り、その間全然外國語に専念すると云ふ大なる利益があることを

記憶しなければならぬ。なほこの外に、これらの説明は生徒を悦ばせるもので、その理由は、生徒は翻譯によりてよりも説明によりて、彼等に自由に賦與されて居る智識上の練磨を、餘計に受けるからである。

併しながらかう云ふ説明を澤山、教科書の註釋に用ゐることは、どうもよろしくない。殊に初學者用の讀本に於て然りである。でこの場合には、説明を本文それ自身の中に織り込むのが最もよい。先づ第一に、さう云ふ註釋や旁註では、説明がどうも必要以上に乾燥になつて、定義のやうになり勝ちである。第二に、生徒はさう云ふ數行の文章を読み通し度いと云ふ氣を起さないでも、ある仲間例へば兩親とか姉妹とかを得て、簡単に言葉の意味を話させるやうな氣分になり易い。即ちそれを翻譯させるのである。今常に生徒に對つて、與へられたる説明を記憶するやうに要求して、以上の傾向を阻止しやうとするのは、確かに得策ではない。これ生徒を驅りて、容易に單なる意識なき記憶機械たらしむるに過ぎないからである。元來註解なるものは、初學者に、眞に善良なる教授を授

教科書の
註釋に説
明を用ゐ
ること

ける上では、僅かに健忘性の生徒が、その豫習の折に、記憶の出來ない言葉の意味や發音を求めることが出來る位の補助になるより外に、重要な意味を持つて居るものではないから、かう云ふ場合には、余は翻譯を用ゐることを躊躇しないのである。

外國語で説明することは、教師が課目を選んで、それを口授する場合に、特に適切である。これには非常に大なる注意を加へ、生徒をしてこれから讀まうと云ふ新らしい文章を眞に充分に周到に覗はさせるやうにする見識を以て實行しなければならぬ——出來る丈け活氣のあるやうにし、且つ又出來る丈け日本語の言葉や文章を用ゐないやうにしなければならぬ。もと／＼教師の文章を讀む方法が肝要で、讀む場合に、生徒が厭でも應でも、それを理解しなければ置けないやうな遣り方で讀まなければならぬ。例へば必要な個所で力を入れたり、對照をなして居る點で語勢を強めたり、音聲を變へたりするのである。かくして後初めて、説明の方法によりて、種々の物體を指示してよいのである——さうして

教師が外
國語を讀
む方法

身振り
で言葉
を説明
する

Window と云ふ言葉に出くわせば、假令以前その言葉が出て来たことがあ
るにしても、窓を指示して少しも差支へがないのである。澤山の言葉は、
身振りなどの方法で説明することが出来る。例へば saw を説明するには、
鋸を以て切る運動を行ひ、それにぎし／＼云ふ音を伴はしむればよい。
cut を説明するには、にせの小刀で一寸切る真似をすれば、それで事足
るのである。かくの如くにして to drink, to sing, to climb, joyous, discontent, to
cry, to sleep, to strike, to cut その他なほ多数の言葉の意味を授けることが出来
るのである。通常騒がしくない程度で、少しばかり暗示を與へると、生
徒は直ちに理解することが出来るのである。

最後に外國語を教授するのに、辭書に見えて居るやうな、直截的な定
義を與へずに、他の説明を用ゐる一種遠廻しの方法がある。これは生徒
の思想を正道に導く爲めばかりに必要なことが往々ある。英語の metropolis
が出て來ると、教師は London is the metropolis of England, Paris is the metropolis
of France, and Berlin is the metropolis of Germany と云ひ、それから一人の生徒に

一種遠
廻し
の方法

向つて Katō, now do you know the meaning of the metropolis? と問ふ。すると生
徒は先づ首府と答へるだらう。併しその時教師はかう云ふ All right, but
can't you explain that word in English? それで生徒は Yes, the metropolis is the greatest
city in a country. と答へる。今度は教師が Very well, it is the first city, the greatest
city, the important or significant city in a country. と云つて、それに次のやうに
附け加へる Now, Akamatsu, can you mention another metropolises in Europe?。而
して生徒が少し許り數へ上げると、教師は Well, that will do と云つて、そ
れで次へ移るのである。この際假令澤山の言葉を使用しても、もと外國
語であるから、贅物ではない。故にかう云ふ具合に行へば、數分間の會
話でも、外國語で全頁を讀むと同様に有益なのである。さうして生徒は、
教師が單にその翻譯ばかりを教へて讀方を繼續する場合よりも、この me-
tropolis なる語彙をよく記憶することゝ考へる。それからなほ未だ了解さ
れない點が残つて居つて、而かもその上説明を加へることが無用か、左
もなくば倦厭を招くやうな種々の場合には、教師は自分の取るべき方法

を試験して見なければならぬ。これ又さう云ふ迂遠な方法を、教科書の中に含ませるよりも、教師に採用させた方がよい理由の一つである。勿論かう云ふ種類の説明を、自然的に巧妙に、而して級全體の必要と立場とに綿密に適應するやうに與へるためには、實驗を積み且つ充分に手練を持つことが必要である。教師は生徒が豫じめ知つて居る事柄や、側ら如何なる説明を、確實に用ゐることが出来るかをよく承知しなければならぬ。その遠廻しの方法に使用する言語は、平易で俗語風な方がよいので、さうすれば説明が一層具體的になつて、都合がよいのである。それから説明は簡に失するよりも繁に過ぎた方がよい。ガベレンツ氏がその言語學の第七十頁に『思想の範圍の狭い御しやべりな人は、初學者にとりて最良の教師である』と云つたが、これには眞理が籠つて居る。教師は何も決して自ら馬鹿になるにも當らないが、自分の智識の程度が高いからと云つて、外國語教授の保育的方法によりて、大に何物かを學ぶ所があることを認めなければならぬ。例へば説明を與へないとか、簡略に

初學者に
とりて最
其の教師

質問に就
教師の
注意すべき

切りあげるとかすれば、目的に達することが出来ないのである。この教授の形式に留意し、さうしていかなる種類の説明が、生徒にとりて最も大なる語學上の利益を與へるかを發見することは利益のあることで、生徒の理解し兼ねる點があれば、直ちに質問させるやうに仕込むことは容易であるから、どの點が理解されたか、どの點が理解されないかを感知するのは普通困難ではない。それには何も直接に質問しなくてもよい。が教師は質問の勞を厭つてはいけない。けれども質問する場合に、『分りましたか』と云ふ形式を用ゐてならぬことは勿論で、かう云ふ問ひをかけた『はい』と云ふ御義理の返答をすることになるので、これは大抵は何等の意義をもなさないものである。それで教師は常に自分等の質問に快よく喜んで應じてくれるし、質問しても、決して笑はれるやうなことがないと云ふことを生徒に信じさせれば充分である。固よりその質問が平易な時には、教師は他の生徒に答へさせてもよいのである。

時間の初めに、教師も生徒も頭腦が最も新鮮で、充分時間の餘裕があ

る時に、次回分の課目を一通り豫習するのは、最もよいことである。時間の了りには、鈴がなる前に、相應の分量丈けすませ度いと云ふ苦心で、教師は焦慮り過ぎたり神經過敏になり勝ちのものである。それがすめば、教師は生徒に書物を見させるが、それもすつかり閉ぢさせるがよいのである。この後の方法を行ふと云ふと、生徒は注意を他に放散せず、一意教師の言に傾聴するからこの方がよい。何となれば彼等は、教師の言葉ですつかり呑み込んで、その些細な動作までも氣を付けなければならぬからである。その際教師の取るべき最上の策は、説明しながら、黒板に新しい言葉を書き下し、すつかり説明して了へば、自分でその文章を朗讀する(語句を挿入せず)か、一人の生徒にそれを讀ましめるかして、授業を終ることである。併し始終同じ方法のみに従ふのはよろしくない。それから文章が若し平易で新しい語がほんの少しばかり出て來る場合には、一人の生徒に、緩つくり力を入れずに朗讀させて、理解の出來ぬ所があれば、そこに止まつて質問をさせることにするがよい。もし文章

教師の参
考になる
べき要點

に二三の見慣れぬ言葉とか、質問を要するやうな面倒な點でもあると、ピリヨッドに達すれば、直ぐ休まずに必ず引き續いて讀み返さなければならぬ。なほ教師は必要と考へられる場合には、もう一層確かめるために、生徒の一人にその内容を自國語で自由に述べさせるがよい。これは兎も角級全體がかう云ふ方法で、課目をすますやうに、すつかり慣れて了ふ迄の一種の拘束である。

凡そ新しい課業を授ける場合に、詩の抜き書きの中に出て來る言葉や語句の稀有な順序は、生地の儘の言語を學ばうとする生徒の本能に、障害を加へるものであるから、余は茲に言葉を散文體に綴つて、それを説明の料として、この障害を阻止することが出来ることを提示する。例へば *And everybody in the house On tip-toe has to creep* の如き行は、先づ *And everybody in the house has to creep on tip-toe* とあつたやうに説明すればよい。又 *at eve* の如き語句も *in the evening* に變更することが出来る。さうすればその讀本の中に、言葉の順序が變つたり、見慣れぬ語句があると云ふと、

詩句の説
明法

生徒はこれは詩の形式が原因をなして居るものと理解し、随つてそれを模倣するやうな傾きに陥らないだらう。若し彼が後になつて問題が出た時、そんな真似をすれば、生徒と云ふものは、日用以外の言語を練習に使用すべきものだと言ふ世間的の理由がないから、教師はそれを訂正しなければならぬ。しかし余が英語初學者のために作つた書物の中に、詩句を用ゐた場合には、勿論常に言語の普通の形式から極めて僅かはづれて居るものを含むやうに試みたのである。

第六章 翻譯、音讀、書取

さて吾々は生徒に對つて、外國語を説明する手段として、翻譯を使用することに關して次のやうな結果に到着した。すなはちそれは唯一最良の方法ではないと言ふこと、控へ目に用ゐなければならぬといふこと、さうして兎に角連絡のある文章を全部翻譯する必要はない、唯だ折々一

翻譯を
使用する
に關し
た結果

語か精々一文を翻譯すればよいと云ふやうな條々である。併しながらこの研究は、吾々が取扱つて見やうとする次の問題、すなはち翻譯を以て生徒が外國語を理解して居るかどうかを試験する方便としては如何かと云ふ問題に對して、既にある光明を投じたのである(九十二頁參看)。

此の場合でも、觀察は翻譯よりも勝れて居る。教師の Show me the window と云ふ命令に従つて、生徒が窓を指し示せば、window はどう云ふ意味かと云ふ質問に對して『窓』と答へるものと同じやうに、その言葉を了解して居ることを示して居るのである。これと同じやうに、教師が生徒に一つの繪を見せて Where is the hat of the child? Where are his shoes? Do you see the roof of the house? 等の質問を出した時、正真正銘のものを指摘することが出来るとか、又は Take the chalk! Stand up! Sit down! Give me your book! Take the book of Takagi and give it to Hayashi! の如き命令を實行し、殊に教師が同時に There is the window, there is the hat of the child, there is the chalk, I stand up など、云つた時に、先方の注文した言葉を正當に適用することが出来る

觀察は
翻譯より
も勝れて
居る

場合も同様である。或は英語で、質問をうけた時に、やはり英語で譯の分つた返事をする事が出来れば、生徒がその質問を理解して居ることは疑ひを容れない。又生徒がある物語を聞いた時に、日本語で(英語ならばなほよいが)それを再び話す事が出来れば、勿論教師が話したことや読んで聞かしたことを了解して居るのである。

新しい拔萃文を家庭で調べるやうに選定してやつたのを、生徒が理解したかどうかを確かめやうと思ふ場合に、大抵翻譯をさせやうと云ふ氣を起すものである。しかしさう云ふ場合でも、若し教師が綿密な活々した方法で課業を教へ(上に云つたやうに)、さうして絶えず生徒に質問の矢を放つて、全體が單に先生一人で持ち切りと云ふやうな獨語に終らないやうに課業をすまることが出来るならば、翻譯によりて試験する必要はない。これは丁度學課を全く終らないとか、教師が唯だそれを急速に翻譯した場合に、不必要なと同じ事である。それで教師は屢、拔萃文の中のある簡単な個所に就て質問すれば、それで充分なことを發見するであ

絶えず
生徒に
質問を
放つた
方法

らう。生徒が拔萃文をすつかり理解して居るかどうかを直間接に示す下に説明するやうな問題のために、その拔萃文が用ゐられて居る場合には特に然りである。

けれどもなほ吾々は、教師が拔萃文の翻譯を主張するものと假定しやう——固よりこれは絶えず目先が變るから、一寸は良い方法かも知れない。教師が全然新しい方法を消化吸収することが出来ない場合などには、殊にさうである。さう云ふ場合に、教師の採るべき最良の方法は、生徒が文章を朗讀して了ふ前に、即座に翻譯することを要求する點に存するのである。これは時間内に、眞に科目の學修が出来たかどうかを試験するために、最も依頼すべき方法である。何んとなれば、生徒は音讀して居る間は、どう譯すればよいかを考へる機会がないし、それを外國語で讀むことになる、自國語のために起つて來る役にも立たぬ思想のために妨害されるやうなことがないからである。その他教師はこの翻譯なるものは、一時間の中で、最も重要な事柄でないことを理解しなけ

翻譯を
せらる
ならば
その方
法があ
らう

ればならぬ。故に翻譯は出来るだけ僅少の時間を占めなければならぬ。生徒には急いでその翻譯を完成するやうに要求しなければならぬ。それからその砌には、學究的に細密に、日本語の語句を批評する必要もない。生徒が完全に會得して居ることが明かになれば、教師が自から正しい日本語の語句を、場合々々に説明してやる方がその語句を生徒に探させて、ために時間を空費するよりも得策である。

語句、言葉の組成、言葉の順序が少しくちがつて居つて、全く日本語風でない場合でも、それは大目に見て置く方がよい。翻譯が唯一のものやうに取扱はれて居る時よりも、以上述べた諸點を注意して居ない際の方が、生徒の日本語に害を加へることが少ないと云ふことは實際その通りである。何かひどく拙劣な語句を使つて居る場合には、教師は生徒達と一所に心から氣隨に笑つて、次のやうに云つてもよい『さてあなた方が書いたのは、非常に立派な日本語とは云へないが、意味は充分明瞭です、さうして今私がこの際心にかけて居ることは、あなた方が英語を理

唯一の翻譯を
そのものやう
に居ると思つ
て悪影響を
なすなうけ

善い國語の課外
國語のほかに
國語のほかに
國語のほかに
國語のほかに

解して居るかと思ふ點であります、で實際あなた方は英語が分つて居るのであります、尤も私はあなた方が日本語では、そんなことを眞面目に云つたり書いたりしないことは知つて居ります。かう云ふ具合に、口づから翻譯をする場合には、これ以上の注意を日本語に拂つてはいけないやうに思はれる——吾々は英語や獨逸語の學科の間は、なるだけ自國語に關係させないやうにすれば、自國語が悪影響を受けることは尠ないわけである。善良な日本語はそんな英語や獨逸語の課業の際に學ぶことの出来るものではない。さうして教師は、自身に對しても、又生徒に對しても、出来る丈けあはれな英語を使用する機會を少なくしなければならぬ。

學力の進んだ生徒が、屢翻譯を行つて、愉快と利益とを贏ち得ると云ふことは、又別箇の問題に屬する。その際さう云ふ翻譯の問題を選ぶには、外國語と日本語との間に、その使用法に就て、大なる差別があるやうにしなければならぬ。但しかう云つたところで、外國語の拔萃文は、

理解に困難なものを必要とすると云ふ意味ではないことは勿論である。生徒が日常翻譯をせず、自由に外國語を読む習慣になつて居るならば、外國語の語句に應ずる最良最適の日本語の語彙を、誰が発見することが出来るかと云ふことに就て爭論することは、變化を喜ぶ彼等にとりて、大なる慰藉になるであらう。故にこの種の練習法と、それから生徒の單語を試むることを主要な目的とするらしい今日流行の、眼による翻譯との間には、別に差異がないのである。余が考へて居る翻譯の練習は、次に書くやうな方法で實行されなければならぬ。先づ第一に文章を級全體に向つて音讀させなければならぬ。第二にその中に何か見慣れぬ言葉があれば、上に述べた方法で説明しなければならぬ。第三にもし又説明する代りに翻譯するならば、辭書に於けるが如く、先づ五つか六つか、日本語の中から、それに相應した言葉を出して、その中から選擇させなければならぬ。第四にそれから生徒が(教場で監視の下で)その翻譯を書き、それを教師が後に音讀して比較し、生徒も各々、誰の翻譯が最も原文に近

余が翻譯練習法

いか、その翻譯は原文の微細な要素を皆取り用ゐてあるが、併しそれが爲めに、日本語は暫らく御留守になつて居るとか、眞髓と調和の點では、原文に比較するに足るけれども、細かい所までは嚴格に含まれて居ないとか、その他種々の判断を下すがよい。約言すれば、この練習は生徒の外國語の智識を試験するためではないが、翻譯術が遭遇すべき困難に就て、ある思想を彼等に與へるのである。而してこれと同一の理由で、時生徒に詩の斷片を押韻して翻譯する技巧を試みさすがよい。併しその翻譯にたづさはることは、唯だ各人の自由に放任するやうな方法を探らなければならぬ。又自國の文學の中に、詩の出來のよい翻譯があれば、生徒が骨折つて試みた翻譯を取つて来て、それを比べるがよい。それからかう云ふ練習の序幕として、例へて云へば、ゲーテのある一部分に關する數種のちがつた翻譯を比較研究し、且つその原本と對照せしめるがよいのである。

教師が注意して仕上げた精巧な翻譯文例は、ずつと學力の進んだ生徒

精巧な翻譯文例

に對つて、人間の思想を云ひ表はす手段となる各言語の間に、最も繊細な變化の影があることに就て、明白なる觀念を與へる補助になる——けれども言語教授の日常の兵糧としては、さう云ふ例は、お勧めすべきものではない。殊に初學者に向つては猶更のことである。

日々の言語教授に際し、生徒に翻譯をやらせることは、時には全く不必要なことがある。若し讀本が希望通り平易なものだと云ふと、各課の中には、單語でも文の構造でも、少しも面倒を惹起さない文章が幾らかあるであらう。又ある文章では、新しい單語の出て来る丈けが面倒だが、併し新しい語彙を聞くために、教師が即座で數分時を生徒に授けさへすれば、さう云ふ文章を翻譯する必要がないのである。吾々が知つて居るやうに、了解するには全く面倒を見ないが、いざ翻譯するとすると、困難な文章が澤山ある。もし生徒が *writer, physician* の意味を知つて居れば *He is more of a writer than a physician* と云ふ文章は直ぐ理解することが出来る。が、その副詞を翻譯するために、最上の方法を發見すること

了解するに面倒な文章を翻譯するが困難なる

複雑した文章の處に

は、彼にとりてさう容易なことではなからう。さうして實際そんなことで時間を潰すのは徒爾である(なほ八十二頁を參看するがい)。

それから最後に、甚だ複雑した文章が若干残ることになるが、それは教師が若し時間を節約する考へで、自らその全部を翻譯しやうとしないならば、その文章だけ他から離して、生徒に翻譯させるがよい。生徒が單語を了解して居るかどうかを試験するために、外國語でそれを説明させることは、ある限られた範圍以外では、甚だ實用的でない。出來のよい學力の進んだ生徒になると、定義を單に記憶するやうな劣悪な方法を採る必要がないから、上の方法はさう云ふ生徒にとりてのみ有益かも知れない。故にこの方法は普通の學校よりも大學教育に於て行つた方が適切である。

若し人ありて、この教授法によると、生徒が讀んだものを理解したかどうかを試みる方法としては、翻譯は最少限度に切り上げることにより、又澤山の日課の中、その最後の殘部でさへも、翻譯せずすますと云ふ

余の說に對する反對

のであるが、これは日課全體を繰り返し、翻譯した舊式の方法よりも、遙かに意に適しないし、さう云ふ風では、生徒がどの點を理解しどの點を理解しないかを知る方便がないと云ふかも知れぬが、余はそれに對して次のやうに答へる。

先づ第一に舊式の方法で屢、翻譯までした文章を、生徒が理解して居ると云つた所で、頗る覺束ないことが間々ある。諳記して居る翻譯の蔭には、最も信用の出來ない不注意が跋扈するものである。それから第二に（而してこの方が一層重要である）新しい方法を正當に適用すれば、探りを入れて生徒がどの位深く讀本の言葉や内容の中に侵入して居るかを試むるために、豊富な種々の方法を獲得し、その結果教師は容易にすべての本質を突きとめたと感ずることが出來るのである。この事は、次に課業を實施する方法を記載するから、それによりて充分明瞭になることであらう。

音讀

さて文章は音讀しなければならぬ。これは兎に角規則として、先づ教

これに對する余の所説

許容して本にあらぬ

師からやつて見るのが最上策である。勿論教師は昨日初めて一通りそれに目を通す時讀んだ。けれども緩々と途中で切つては説明などを施して讀んだので、これは畢竟目新しいもので意味を理會することが、彼等にとりて必要だつたからである。併し今日は、教師はそれ相應の發音で活氣の充ちた自然的な方法で、速やかに流暢に讀んでよい。それから生徒が順次に同じ所を讀む。初歩の程度だと云ふと、一文章だけ宛讀んでから、その發音がなほ生徒の頭に新しい間に、それを繰り返させなければならぬ。後になれば、もつと長い文章をとつて來て、それをあまり細かく分けずに、生徒に分配してよいのである。さうしてその實行される讀方に就ては幾ら精密に注意しても、それで充分だと云ふことはない。吃つたり、密接な關係のある言葉の間を切つて見たり、習慣上法則になつて居る自然的な又必須な切れ目を無視したりすることは、決して許容してはならぬ。除外例だなど、云ふことさへ相成らぬのである。それで初學者に對しては、作り飾らぬ發音で、文章を續けて讀むやうに要求し

なければならぬ。假令讀方を正すために幾度も繰り返させる面倒はあつても、教師はこれを後悔しないだらう。初め數ヶ月間餘計にこの點に注意して置くと、後になればすつと譯もなくよく讀めるやうになるであらう——よく讀めると云ふ意味は、曉り易いと云ふ意味である。この音讀は發音の練習になる外に、又教授の目的に資する他の利益があるのである。既にミルトン(Milton)は、讀者が理解して居るか否かは、文章を讀んで居る方法のみで、容易に聞き取ることが出来ると云つた。實際よく讀む人は、最も微細な方法で、その眞價を現はすことが出来る。随つて生徒の讀方の不確實なること、間違つた語勢などを通して、その讀んで居る、文章中に於ける、理解の出來ぬ、或は學んだことのない點を抉出す程、聞き方に鋭敏になることは、何も六ヶ敷いことではない——さうしてさう云ふ場合には、彼は生徒を捕へて、その智識上の缺點を知得せしめるがよい。この缺點が補充されると、勿論生徒は前よりもよく、その文章を再讀しなければならぬ。會話を讀誦する場合に、級の種々の生

聲を捕へて讀む利益

歌を歌ふこと

徒を兩方に配分してこれを行ふとは、常に趣味のあることで、自然的語勢や發音を鼓舞する方法として容易に適用することが出来るものである。それから聲を捕へて讀むことも、等閑に附してはならない。これは一時に全級のものを專注させる利益があり、獨り／＼で讀む時よりも、外國語の音を發する練習を餘計にすることが出来るのである。固より教師は、一人づゝ讀むのを聞く時のやうに、鋭敏な監督を施すことは出來ないが、決してそれが行へぬと云ふわけはない。練習を積めば、全體の合唱の中にも、二三の誤謬を捜し出すことが出来るやうになる。さうして誰が讀方を誤まつたかと云ふこと迄も、可なり確かに分るやうになり、さうすればその嫌疑のある生徒を引き出して、獨りで六ヶ敷い個所を讀ますことが出来るのである。さて言語教授上の扶助で、これと性質を同うするものは、歌を歌ふことである。若し教師にして讀本中のある詩句を歌ふことを教へる方法を知つて居るならば、さう云ふ級全體が歌ふと云ふことは、有益なると同時に、活氣を帯ばしめることになり、言葉は

一層容易に記憶することが出来、發音は改善することが出来るのである。教授上の一要素として、外國語で歌を歌ふことは、已に久しき以前にパウエル、パシー(Paul Passy)が使用した方法である。それはストックホルムの有名なるバルムグレンスケ、サムスコラ(Palmgrenske Samskola)や幾多の獨逸の學校では、盛んに用ゐられて居る。而して近年又あるデンマークの教師が、甚だ面白い方法でそれを實施した。ある場合には、生徒が外國の歌を歌ふために、休息時間の一部を割愛したことさへあるので、その時は隣室の教師は、その授業時間中、歌ふ方を流し眼で見たものである。生徒が一つの文章を繰り返し／＼讀めば讀む程、單語殊に語の結合が確實にその記憶に根を張るのである。實に教授の組織全體をこの經驗の上に基づかしめんとした企てさへあつて、それは例へばブアイル(Pfeil)氏の非常に興味のある小冊子『如何にして言語を最も容易に最もよく學ぶべからるか』(Wie lernt man eine Sprache am leichtesten und besten?)これは千八百八十四年、

ブアイル
氏の教授
法

プレスラウ版及びなほ同氏の著にかゝる他の數種の書籍、就中教育上の

獻策としても價值のある彼の一方法(Eine)と名づけた家庭教育資料(Beiträge zur Erziehung in Hause ライプツヒ版、千八百七十九年第三版)の中に見えて居る。彼の教授法は簡單で、文法も要しなれば、外國語に翻譯することもない。唯だ一時に一つの外國語を授けるので、次の如き方法によりて、一週間に通例六時間或はそれ以上を充當して、急速力を以て進行するのである。それで劈頭第一から、ある作家の作物を使用するやうり方で、先づ初めは二行程を、教師が先きに音讀する。それから生徒が音讀する。もし必要ならば、數回繰り返す。それから教師が一語一語を翻譯する。氏は『全く獨逸語の文構造を無視して行ふのである。語句の様子を正しい獨逸語に翻譯することは、余の許すことの出来ない所である』と云つて居る。それから同様に生徒が翻譯する。次に同じ日課を學んで居る日に、なほ二度音讀する。それから次の日課の初めに今一度音讀する。そんなわけで、日曜日毎に、前週間に修めた全部を音讀するので、かう云ふ具合に進んで退轉しなければ、かくの如き月賦制で學修した後

に、書物の全部又は大部分は連続して読み通すことが出来るのである。もはや誤解の憂がないやうになれば、即時に翻譯を省略し、而して一定の時間の間、唯だ讀むことになつて居る平易な文章を取扱ふ時には、全くこれを中止してよいのである。かく外國文を繰り返し讀誦する間は――生徒がその意味を理解した後、少なくとも四度――自國語は隨意に背景の中に入つて居るので、外國語の熟語が、生徒の頭腦を支配するのである。ブアイル氏は自らも信じて居るやうに――又吾々がこの人を信用してはならぬと云ふ理由が何處にある――短日月の間にこの方法によりて、智識を得ること並に教授を施す上に於て、非常に好結果を得たのであるが、彼はその方法を單に私人的教授に用ひ、決して教場では用ゐなかつたのである。かくして學んだ言語材料を自分の隨意に用ゐたいと云ふ衝動は、甚だ初期の中に現はれるものである。故に氏は三十二歳の生徒に就て、下のやうに語つて居る。その男子は田舎の學校で教育をうけ、未だ曾ていかなる外國語をも學んだことのない者であるが、十課目の教

學んだ材料を
任意に用ひ
るに衝動と
云ふ

授を受けてから、八つ折りの紙に四枚、伊太利語で手紙を書いて、彼に送つたと云ふことである。その文章はすつかり正しいとは云へないが、讀んで全く意味が通じたのである。

併しこの方法は甚だしく精神のない機械的のものだと云ふ人も多分あるであらう。尤もなことだ。けれども吾々の舊式の方法が、その訓練に使用したいろ／＼の愚かな事柄に就ては暫らくこれを度外に置いても、例へばその中、文法上のたはごとのやうな全く意味のない事柄を幾度も翻譯することよりも、何か意味のある、それも理解して居るある意味のあるものを幾度も音讀した方が、遙かに精神のない方法であるとは考へられない。併しブアイル氏の方法に、不相應なる賞讀の辭を與へるとは、決して余の意見ではない。兎に角學校用としては賞讀することが出来ない。その方法はあんまり單調に失して居る。それで今少しく教授法に變化あらしめたならば、確かに同等或はより以上の利益を收めることが出来やうと思ふ。既に上述の建案の中で、氏の教授法から岐路へ外れたも

氏の教授
法の缺陷

氏の説に
よりて學に
び得たる

發音の模
倣

本文を記
憶させる
こと

のが少しあつたことが認められやうと考へる。それで今余は、その方法から學ぶことが出来るあるものに就て注意を喚起するに止めて置かう。即ち第一に吾々は翻譯が確かに無用となれば、出来る丈け早くそれを廢止すべきこと、さうして第二には、吾々の最も重大なる目的即ち發音上外國語の特色が、それを時々使用することが出来る位の印象を生徒に與へるには、多く繰り返すにあらざれば能はずと云ふことを云つて置かう。初歩の内は、發音を聴き取つてそれを模倣して發することは、生徒にとりて頗る大切なことで、發音の練習に必要な繰り返し繰り返しする事か、又は生徒に文章を記憶させる助けになるのである。教師は生徒が發音の練習を開始する前に、文章の意味を了解して居るか、而してそれを忘却して了つて、言葉が單に意味のない音になりはせぬかを突きとめること丈けは、是非ともしなければならぬ。

無論後になれば、唯だ發音のため計りに、さう幾度も繰返す必要はない。さうなると本文を記憶させるやうにしてよいのである。けれどもこ

不知に何
國語で何
か話すに
か出ると
なるやう
なるやう
に來る

れには危険が伴ふのである。即ちその意味を顧みずに、文章を生命のない言語の行列として學び、且つ記憶することになるので、これはもし教師がそれを規則とするやうなことがあるれば猶更らるのである。けれども例へば半年宛或は今少しく繁々と、文章を削りあて、それを記憶させることは、生徒にとりて甚だ有益なことかも知れない。彼等は自ら讀誦した文章の一つを選んでよい。それから彼等は非常によい發音と正しい語法とで、それを讀むものと豫期されなければならぬ。鸚鵡の藝當ではないのである。併しこの外主要なる點は、生徒が意味を忘れて了はないうやうに、繰り返し、本文に注意を注ぐことで、その結果彼等はさう云ふ風にして本文に親しみが出來、終にはそれを直ちに記憶する必要がないやうに、殆ど或は全くそれを呑み込むことが出来るのである。さうしてこれは、同時に次のやうな方法で、行ふことが出来る、即ち生徒は種々の事柄を活版摺りの本文の上で一々檢索しないで、云ふことが出来るやうになり、その極不知不識の間に全く隨意に外國語で何か話す能

力を授けられることになるのである。

教師は一日分の學課を幾多の文章に分ち、それを先づ自ら發音し、それから生徒に繰り返させるがよい。生徒は皆その書物を閉ぢるので、それから又教師が一つの文章を讀む時は、それを繰り返すお鉢が、どの生徒に廻つて來るか誰一人知らないのである。この教授法は、余が後に建議しやうと思つて居る練習と一所に、それを實施することも出来るが、この方法によりて教師は、生徒の注意力が、今度は誰その順番だと云ふことを當てにしてさまよひあるくやうなことの無いやうに、確かにして置くことが出来るのである。とりも直さず始終めい／＼の順番になつて居るのである。故に教師は例へば次のやうに云ふ。又それに對する生徒の答へを分り易いやうに併記すると

教師 Man is mortal. Mr. Katō, repeat it!

加藤 Man is mortal.

教師 Mr. Itō, also you repeat it!

誰にお鉢が廻るか分て來るか

伊藤 Man is mortal.

教師 But his reputation which he gains is immortal. Repeat it, Mr. Ogawa!

小川 But his reputation which he gains is immortal.

教師 Very well. Now repeat all of them, Mr. Fukui!

福井 Man is mortal, but his reputation which he gains is immortal.

のやうなものである。或は又變化の方法によりて、教師は文章を繰り返す最初の一人をして、その仲間の一人を呼んで、再びそれを繰返さしてもよいのである。

今序でだから余がある初歩の課業を授ける場合に、生徒の名前を佛蘭西語で教へてやることを常として居つたことを話したい。それは黒板に書いたもので(勿論統一的發音符によりて、下文を見よ)生徒は非常に速やかに、それを覺えたものである。それで普通は唯だ生徒の第一名、時には又その綽名などを翻譯したものである。この方法は生徒を喜ばしめた。而して教師は佛蘭西文を讀んだり綴つたりする場合に、言葉のなだらか

生徒の名前を佛蘭西語で教へること

さをせきとめることなしに、生徒の名前を使用することが出来る便益があるのである。

なほこの他に同様の方法がある。甲生徒が音讀する。一つの文章が了れば、教師か左もなくばその生徒が、誰か外の生徒を指名してそれを繰り返させる。或は教師が文章を音讀し、それから Translate it, Mr. Hayashi と云ふ。さうして林が翻譯して了へば、Repeat it in English とやる。これは同じ生徒をして先づ翻譯せしめ、次にそれを英語で云はせるよりも良い方法である、何故かと云ふに、さう云ふ鹽梅にすると云ふと、一方の發音の根本から他方の發音の根本へ急に變化する必要がないからである。或はある文章が全部音讀された場合には、教師はそれを一時に一文づゝ日本語に翻譯し、それから生徒をして同じ思想を英語で説き示させるがよい。これは勿論以上の諸方法の中で、最も六ヶ敷いもので、注意して適用しなければならぬ。何となれば、生徒は與へられた英語を想ひ起さずに、日本語から翻譯しやう(即ち日本語の型にはめて英文を作る意味)と

教授上の
總訣

云ふ傾向に導かれ易く、随つてその結果自國語から外國語に翻譯する舊式の方法に随伴するあらゆる危険を犯すことになるからである(下文参照)。故にこの種の練習は、唯だ折々行ふに止め、生徒がその使用された文章を殆ど英語の形式で呑み込めた程、彼等に親しみが出來た時にのみ、これを行ふのが、最上の策である。かの一人一人の生徒の代りに、全級をして聲を揃へて文章を繰り返させることは、かう云ふ練習の變形したものである。

それから生徒の進歩が鈍り出すのは、級全體が本文となほ未だ充分に會通して居ない事を示すのであるから、その際取るべき最上の策は『よろしい、今あなた方はこの文章を三遍聲を揃へて讀みなさい。それから吾は以前のやうに書物を持たずに、繰り返して最初から始めませう』と云ふことである、さうすれば久しからずして教師は、生徒が書物によりて知つて居る事柄とは少しくかけ離れた事柄に立ち入ることが出來て、その結果も良いのである。こんなわけで、彼は家庭に於て記憶した事柄を、

生徒の進
歩が鈍り
出した場
合の處置

考へもなくべら／＼喋舌ることに對して防禦するのである——これは無論注意深い教師ならば、生徒の讀みぶりで容易に發見することが出来る所である。けれどもあまりひどく本文と乖離することは、お勸めしかねるので、それがため混雜を惹起し、生徒をして本文と十二分に親しくならせるやうにするための手近の事柄から、あまり遠くさまよふ危険に導くのである。それであまり岐路に入らないやうにするのが最良の法である。もしさうでない、生徒をして教師が作つた文章を翻譯させる必要が、あんまり頻々と起つて來ること、思ふ。又事實、翻譯させなければ、級全體がそれを理解して居るかどうかが分らないからである。かう云ふ練習に方りて最も必要な事柄は、質問付きの練習に於けるが如く、生徒をして自分の游げる範圍以外に出て、恐怖を起して周章狼狽させないやうにする點に存するのである。範圍外に出ては、決して游泳術を稽古することが出来ないからである。

上來吾々は、教師が口授したことを、生徒の方で繰り返すこと、假定

あまり
岐路に入ら
ないやうに
する

書取の練習

して來た。今もしその繰り返すことを紙上に書きつけるとなると、それは書取となるのである。この書取の練習は決して忽諾に附してはならぬいもので上から述べ來つた練習と半ば並行して、種々なる方法にて實行する事が出来るものである。それで教師がある一つの文章を云つてもよいし、生徒の中の一人が、それを音讀してもよい。それには一度で充分であるが、教師は二度それを繰り返してもよいし、或は自分で一度讀んでから書き下す前に、一人の生徒にそれを繰り返させてもよいのである。その文章は、初歩ならば、讀本の中からそのまゝ取り、第二級ならば、矢張り讀本から取ることは取るが、少しくこれに變更を加へるのである。全然新しい文章は、唯だ學力の進歩した生徒にのみ課すべきものである。それも僅少の程度に止めて置く必要がある、その理由は、全體書取によりては何事も學ぶべきものではなく、唯だ學んだ事柄の試験に過ぎない上に、各々の經驗に徴すると、生徒が書取の時演出した誤謬は、もと／＼彼等がそれを書いたのであるから、容易にその記憶に根ざすも

その方法

ので、教師の訂正によりて削除されないからである。それから書取は、黒板か習字本(或は石盤)に書いてよい。一人が黒板に書くと、他の生徒は習字本に書くやうにしてもよい。又時々一級總が、りで、誤謬を正しても差支へがない。若し黒板に餘白があれば、他の生徒も同時に、同じものでもちがつたものでも書いてよい。書取は統一的發音符に基いて書いてもよいし、綴字的に書いてもよい。それから一人の生徒がある方法で書けば、外の生徒は他の方法で書くやうにして、後でこの兩方を比較するがよい。

さて終りに、書取は余が後に至つて提出しやうと思つて居る數種の練習法と一所に使用してよいのである。ある問題を書き取らせ、その問題と答案とを共に書かせるやうにし、文章は先づ一人稱で書取り、これを後に他の人稱に変更させるがよい。書取の利益は、第一、生徒をして話された言葉を速かに且つ鋭敏に會得する練習を積ましめる事、第二、生徒が會得した事柄を試験する有力なる方法を教師に與へる事、第三、書

書取の利益
不利益

取をすれば、大抵の場合、生徒が一度書いたものは、甚だよく記憶することなどである。併しながら書取の不利益な(すべて書く方に關係のある)課目に於ける不利益と同じやうに(點は、口頭の練習よりも時間を多く消磨する點に存するのである)。

第七章 語法教授上の要點(その二)

さてこれから余は、生徒が書物の中で見たことのない、或は又一寸前までは誰からも聞いたことがない事柄を、外國語で云はなければならぬ場合に於ける、種々の練習を考究して見やう。かう云ふ練習の中で、先づ第一に行ふべき、さうして最も平易なものは、數學的練習である。併し余は今茲に立ち止まつて先づ一般的に數詞について叙述しなければならぬ。數年間外國語を學んでも、その數詞を全く會得して居ない生徒が、歐羅巴の學校にあることは必ずしも稀ではない。彼等は日附に就て大に

數年間外國語を學んでも、その數詞を全く會得して居ない生徒が、歐羅巴の學校にあることは必ずしも稀ではない。

困難を感ずるのである。この現象の生ずる原因は何であらうか。勿論佛蘭西語の數詞の如きは面倒で、獨逸語のそれよりも厄介である。併し佛蘭西語の動詞も又獨逸語のそれよりも面倒である。一寸英語の讀本を編纂する場合に、本文の中に英語の形容詞を唯だの一つも入れないやうにして、その代りに日本語の善し、醜し、眩ゆし、白しの如きものを、本文の英語の中に混交するやうな體裁にして見るがよい。生徒は果して英語の形容詞を學ぶことが出来るであらうか。がこの事は數詞の場合にも實行されて居ることその儘ではないか。英語の本文に *two* と書いてあつても又一千八百八十八年と書いてあつても、どちらにしても同じ理窟で、何れの場合に於ても、生徒は音讀して居る場合に、日本語から英語に翻譯しなければならぬ。ところが英吉利の學校などでも、數詞を佛蘭西語から翻譯したり、佛蘭西語の數詞を理解するやうな練習は殆ど全くない。それでこの種の言葉に關しては、翻譯の甚だ拙劣な方法が用ゐられて居る計りで、それはある規則に従つて、生徒に外國語で或る語句を作らせ、

その原因

豫め外國人がさう云ふ場合に、如何に試みるかを見聞する機會を充分に持たせない方法である。家庭で豫習をする場合に、1793 はどう讀むかと云ふことを骨折つて考へるのは、至つて眞摯な生徒に限る、これは吾々が保證することが出来るのである。

次に是非とも改革しなければならぬ一つの事件がある。而かもその改革を施すことは、誠に易々たるものである。それは外でもない。初學者用の外國語の教科書から、すつかりアラビヤ數字を除き去つてしまふがよいのである。さうしてその結果、若し教科書の中に、充分に書き現はした數詞が澤山あれば——特に若し教師がこの次に示さうと考へて居る方法で、外國語の簡単な數學的練習を澤山生徒に練習させるならば——生徒が教科書を棄て、文學的作品を讀むことが出来る位に學力が進んだ場合には、文中に出くわす數詞をすべて易々となだらかに正しく讀むことが出来るやうになることが分るであらう。

この數學的練習なる者は、別に言葉をよく知つて居ないでも出来る仕

教科書が
アラビヤ
數字を除
くべきだ
といふ

事であるから、一二ヶ月間教授をうけた極めて初等の時代から始めてよいのである。それで教師は、唯だ數詞の練習を行はしめるのみならず又外國語の言葉と發音とを會得させるやうにするがよい。質問は上に云つたやうに、級全體に向つて發し、それから教師が、指名するか或は單に眼付きで、それに返答すべき生徒を指示するのである。その返答には、質問も含んで云はなければならぬ規定にして置く。例へば

教師 Three and six, how much, Mr. Hosokawa?

細川 Three and six are twelve. (Repeat it, Mr. Yamazaki!)

教師 Three and nine are... Mr. Kusaka?

日下 Three and nine are eleven.

教師 You have mistaken; is it good, Mr. Oi?

大井 Yes, three and nine are twelve.

の如き會話が行はれるのである。故に教師はこの練習の傍ら、實數を入れた計算問題を提出するのも、よい考案である。就中外國貨幣の名稱を

生徒の試験の
力を試す
と一法
調をし
いて適
も用
いし

吞み込ませるのもよい。例へば Ten pennies, how many sens are they valuable to? Twelve-two sens, how many rins? とか、又簡単な乗法の規則を示すために If one pence costs three sens, how much five pence? のやうな例を出すのもよい。さうして教師はさう云ふ練習のために、若干の日課を全部適用することになるが、これはちと多過ぎると差し控へる必要はない。後になれば、時に課業中の數分時を割愛して、生徒に練習をさせるがよいのである。固より算術を教授するのではないから、大抵は加法とか乗法とか、平易な問題で辛抱して置くのが最上である。勿論眼先きを變へるために、一人の生徒が他の生徒に問題を與へて解答させてもよいのである。生徒がどの位の單語を覚えて居るかを取調べる場合にも、數詞を適用することが出来る。その際生徒にはある順序を立て、實數で計算することを許すやうにするので、さうすれば生徒は、曾て課業の時使用されたことのない或る言葉を、逐一述べなければならぬことになるのである。生徒が互に負けじ劣らじと競争するその熱心さを見るのも、時にとりて

興味のあることである。さうすると次のやうなことが屢々起つて来る。即ち出来ましたと云つた生徒が、外の一人の生徒が、今までまだ口にせられたことのない言葉を、抜萃文の中から抽出して讀むと云ふと、忽ちその前言を食んで、まだ出来ないことになることがある。これはある一つの思想が他の思想を暗示して、これに結合せしめることがあるのである。佛蘭西語では、母音に先んずるか、子音に先んずるかによつて、數詞の形式が變化するから、又この點に注意しなければならぬ。

生徒が數詞の後へ附けることの出来ない語、例へば venir とか D'aujourd'hui とか tout の如き語を用ゐることは先づない。そんな事をする時、自分が言葉の意義を知らないことを暴露することになるのである。がさう云ふ場合には、級全體は勝手に笑ひさゝめいてよいのである。凡そ世の中に容易なことがあると云つても、本當に理解の出来て居る言葉を、人がしゃべつて居るのを聞く程樂なことではない。さうして疑問のある場合には、教師はだしぬけに翻譯を命じてよいのである。しかしかう云ふ場合に

は、生徒は單に自分が理解して居る言葉ばかりを擧げるから、餘計なことになり勝ちであるが、無論その言葉でも、それを調べることは、生徒にとりて有益なことである。

至つて必要な練習が數ある中に、讀んだ文章を、質問と答へとの體裁に轉置する方法がある。教師はむしろ初期に於て、この方法を始めてよい。併し最初から而かも常に嚴格に、生徒の返答を完全な文章の形式に作らせるやうに要求しなければならぬ。吾々は若し生徒が、唯だ教師のすべての質問に對して *oui* か *non* か、或は他の同様なわけの分つた返答で答へることが出来さへすれば、大膽にやつて行けるやうな、そんな平凡な藝當には用がない。余が意味して居る練習の方法を説明するために、余の編纂した佛語讀本の開卷第一にある本文の一に基づいたものを次に書かうとおもふ。

Enfant gâté!

Veux-tu du pâté?

生徒の返答は完全な文章の形式に書かせる

Non, maman, il est trop sale!

Veux-tu du rôti ?

Non, maman, il est trop cuit

Veux-to du jambon ?

Non, maman, il n'est pas bon !

Veux-tu du pain ?

Non, maman, le pain ne vaut rien !

Enfant gâté', tu ne veux rien manger.

Enfant gâté, tu seras fouetté !

それから次の質問は上文によつたものである。

教師 Es-tu un enfant ?

生徒 Oui, monsieur, je suis un enfant.

教師 Es-tu un enfant gâté ?

生徒 Non, monsieur, je ne suis pas un enfant gâté.

教師 L'enfant gâté veut-il du pâté ?

生徒 Non, monsieur, il ne veut pas du pâté.

教師 Veut-il du rôti ?

生徒 Non, monsieur, il ne veut pas du rôti.

教師 Veut-il du pain ?

生徒 Non, monsieur, il ne veut pas du pain.

教師 Veut-il du jambon ?

生徒 Non, monsieur, il ne veut pas du jambon.

教師 Pourquoi ne veut-il pas du pâté ?

生徒 Parce que le pâté est trop sale.

教師 Pourquoi ne veut-il pas du jambon ?

生徒 Il ne veut pas du jambon parce qu'il ne'st pas bon.

教師 Pourquoi ne veut-il pas du rôti ?

生徒 Parce qu'il est trop cuit.

- 教師 Pourquoi ne veut-il pas du pain ?
 生徒 Parce que le pain ne vaut rien.
 教師 Qu'est-ce qui est trop salé ?
 生徒 C'est le pâté qui est trop salé.
 教師 Qu'est-ce qui ne vaut rien ?
 生徒 C'est le pain qui ne vaut rien.
 教師 Qu'est-ce qui est trop cuit ?
 生徒 Le jambon est trop cuit.
 教師 L'enfant gâté sera-t-il fonetté ?
 生徒 Oui, monsieur, il sera fonetté.
 教師 Pourquoi sera-t-il fonetté ?
 生徒 Parce qu'il ne veut rien manger.
 教師 Va-t-on chercher le bâton pour taper l'enfant gâté ?
 生徒 Oui, monsieur, on s'en va chercher le bâton pour venir taper l'enfant.

出来る
 丈の
 多數の
 質問を
 出さ
 なく

こんなわけで、単純な一寸した本文でも、それから澤山の質問を提出することが出来る事が分るであらう。さうして殊に最初にありては、出来る丈け多數の質問を生徒に聞いてやつて、練習に慣れるやうにし、かくして生徒が巧みに流暢に話しが出来るやうにすることが肝心である。上のやうにすべてさう云ふ質問が、活版摺りになつて居るのを見ると、誰でもこれは單調な方法で、長時間を要するものだと思へるかも知れぬが、少しく練習をすれば、教師の方でも生徒の方でも、練習は實際とどし進捗することになるのである。それから初學者を取扱ふ場合には、質問を作るのに、本文の言葉と出来る丈けかけ離れぬやうにするのが最もよい。さうすれば生徒の方で返答をする場合に、少しも變改を加へずに、その言葉を大部分或は全部使用することが出来るからである。この練習では、生徒がその文章を記憶することを假定してはないが、これを手蔓にして、生徒をしてその文章を全く呑み込ませるやうにすることが出来ることは勿論である。生徒にこれならばと云ふ自信を持たせ、且つ

最初から彼等に對つてあまり多きを求めないために、教師は初め少しの日課を授ける場合に、文章を一通り質問の形式で讀む間は、その本を開けた儘にして置くやうに、生徒に許してもよい。さうすれば生徒は返答を記憶することが出来なければ、それを見る事が出来るのである。それから本を閉じて、本文に依頼せずに、同じ(或は殆ど同じ)質問に答へさせるがよい。固よりさう云ふ練習を實行する初め二三度は、生徒が次々に數人の生徒に、同じ質問をかけてもよい。さうして極く初めならば、教師は級全體に向つて、練習は如何にして進行すべきものなるかを示すために、二三の質問とそれに相應する答案とを、黑板の上を書いてよいのである。

生徒が練習をやつて居る中に、假令文章を呑み込んだ所で、教師の質問に對する答案は決して機械的になるものではない。そのわけは、生徒の方では、質問の形式を考察し、それから答案の中には如何なることを含ますべきか、又いかに文章を云ひ表はし、いかに文體を構成すべきか

本文から
かき離れ
ることを
あまり早
くから奨
励しない
方がよい

に就て、思案を廻らす必要があるからである。生徒が随意に讀本の言葉に少しばかり變改を加へ、代名詞を名詞の代りに置くやうなことをすれば、無論教師の方では満足に感ずるに相違ない。唯だ本文からひどくかけ離れることを、あまり早くから奨励しないやうにするのが最もよいのである。上に挙げた例の中、最後の質問は、以前同じ本の中で讀んだ文章に基づいたものであるが、これは教師が既に至つて初期から、ある日の練習を變へて、何か前に習つた事柄を、それに加へるやうにすることが出来ることを示して居るのである。生徒は半ば、認識の愉快、半ば、外國語に通ずる機會が彼等に授けられたと云ふ愉快によりて、さう云ふ質問を歓迎することゝ思ふ。それで時日が経過するにつれて、教師は追讀本の材料から離れてもよいので、例へば教師はその言葉を用ひて、生徒の一身上の事柄を尋ねてもよいし、又英語の教授以外に、生徒が興味を感ずる事柄を尋ねてもよい。もしその拔萃文に *king* と云ふ言葉と種の國名が出て居れば、教師は *What is the name of the king of England* (或は

our king)のやうな質問を發すべきである。

初めの間は質問を發するのは教師ばかりである。併しそれもさう何時迄もと云ふわけには行かない。その中には、教師が眼先きを變へるために、生徒同士質問をさせるやうにしてよいのである。そんなわけで、生徒は文章を疑問の形式に構成することを知るのであつて、これは生徒が言語を實用的に使用するようになる場合に、彼等が先方の問に對して返事を與へることが出来ると同じやうに、必要なことである。獨逸の學校では文法上の範疇と一所に、この考案によつた練習の規則正しい組織を教授するのである。それには讀本中の指定されたる文章によりて、生徒は先づ主格の質問、次に動詞の質問、次に目的格の質問などを作る。例へば *The mother of John has broken her kitchen-pot*と云ふ文章で、教師が主格の質問を要求すれば、甲生徒は乙生徒に *Who has broken the kitchen-pot?*と云ふ質問を出す。若し動詞の質問ならば *What has the mother of John done?* 目的格の質問ならば *What is it that the mother of John has broken?* とするやうなもので

生徒同士
質問をさ
せる

その方法

ある。もし又初學者に、文法上の面倒な點を助太刀をしてやらうと思へば、二三の文章の種々の部分に線を引いて、黑板に書いてもよい。後になれば教師は、一人の生徒に、讀んだ本文中の文章を悉皆——勿論さう云ふ文章がそんな變化に供せられる限りに於てのみ——例へば目的格の質問に變るやうに命じてもよい。それで質問が出る度に、教師は他の生徒を選んで、これに返事をさせるのである。それから今度は、他の生徒に命じて、同じ文章か或は次の節にある文章を、主格の質問などに變へさせるのである。云ふ迄もないことであるが、教師は唯だ本文の機械的變更のみで、さし許してはいけない、常に生徒をしてよく常識を活用させ、尋常世間の會話では出て來ぬやうな質問を作らぬやうにさせなければならぬ。

生徒が自身で質問を發する時には、唯だ奴隸的に本文その儘に盲従するより外に、何事をもなすことが出來ないのは、固より自然の勢であつて、随つて生徒に質問させることはよいことではない。凡そ教師は他人

あま
りた
るに
漠然
たり
文章
はた
るに
問に
はあ
る適
當で
あ

の轍を踏むことを避けなければならぬ。彼自身で屢、質問を發しなければならぬ。彼は二三の文章の主意を捕捉し、ある些細な點をねらひ、或は廣い問題を尋ねてよいのであるが、唯だ彼の記憶すべきことは、あまり廣きに過ぎる文章は、それを解くのに非常に多數の生徒を要するか、或はその内容が全く空虚で無意味なことである。加之あまり廣きに失すると、その結果は本文の一頁全體に相應する質問が、僅かに二三に過ぎないことになるから、折角の練習も、殆ど何等の貢獻をもしないやうに萎縮して了ひ、随つて本文は當然あるべきやうに、強い細かい印象を與へることが出來ないことになるのである。それから質問はとりわけ可成的ありの儘に聞かなければならぬ。

若しこの質問を用ゐる練習が實施せられて、機に臨み變に應じて、遺憾なくその方法が正當に用ゐる盡くされるならば——活氣と機智とを以て、さうして絶えず生徒の立場を考量して——教師は生徒に對して外國語で語るばかりでなく、これと共に談ずるを得る澤山の機會を獲得すること

繰返し物
語ること

が出来るのである。而して生徒がなほ未だ理解しない言葉で、生徒に話すのでないことを注意するがよい——この憂慮は初期に會話の練習を奨励すべきかてふ問題に就て疑惑を抱いて居る人が屢、云ふ所である——併し極めて初期の時代から、生徒に理解させることが出來ないとか、若しくは同じ言葉で譯の分つた返答をさせることが出來ないやうな事柄を、教師の方から云ふやうなことはないのである。

教師は全く不知不識の間に、かう云ふ練習から繰り返し物語ることに歩を進めることが出来る。この場合には質問は單文では返事が出來ず、少なくとも數行位の内容のある記事で返答の出來るやうな具合に構成しなければならぬ。故に初期の間は、問答の手段で詳細に研究された既修の文章ばかりでなければならぬが、繰り返し物語る場合では、さう云ふ文章は追々と長いものを作るやうに要求しなければならぬ。後になれば教師は、級全體に準備させるために割當て、置かなかつた文章を、繰り返し物語るために用ゐてもよい。若し必要ならば、數度音讀し、それか

ら口述でも筆答でも、或は初めに口述後に筆答でも、その何れにしても、出来るだけ澤山それを繰り返して話すやうに要求することにするのである。若し又使用した書物の手本がどつさりあれば、生徒にまあ二十分か三十分の餘裕を與へて、自ら靜かにその文章を読み通させ、それから時間の餘分をあて、記憶の出來た部分を書き下すことに使用させるがよいのである。さう云ふ練習は、自國語を教授する際に廣く用ゐられて居るもので、理會力殊に本來その國語に屬するものと其の然らざるものとを甄別する能力を鋭敏ならしめる點で、甚だ利益があるが、なほ又語法上の技術、即ち云ひ現はしの手法を形式上會得する力を發達させるのである。これは畢竟するに、原本に使用してある言葉が、多く繰り返し物語る中に入り込み、かくして繰り返す人の所有に歸するからである。勿論生徒はかう云ふ練習では、外國語の場合よりも自國語の場合の方がすつと早く熟練するものである。それでも上に示した理會力を鋭敏ならしめ、語法上の技術を發達せしめる二つの點では、毫もその價值を減じな

その利益

い。茲ではこの後者の方が一層必要である。が自國語の教授では、前者を主として重んずる傾向があつて、これはむしろ大に失する位である。生徒の學力が大に進んだ場合でも、自分が讀んだもの、報告を(英語等で)することは、彼等にとりては甚だ有益なことである——單に説話或は歴史の一斷片を簡單に繰り返すに止めず、ある哲學上或は評論上の論文などに見えて居る思想の傾向を一覽するがよい。

多數の文章は又種々なる方法で改造に供せられるので、それによりて同時に文法上の關係を習得することが出来る。丁度拔萃文の語彙や文章が、今一度生徒の頭腦中で檢閲せられるやうなものである。それで單數形は、若しその文の關係上、複數が意味をなす以上は、悉くこれを複數形に變するがよい——文章をその印刷した形で通覽してから、生徒はそれを音讀するので、その際一語一語に就て、果してそれを複數にすべきものか否か、而して複數ではいかになるべきかと云ふことを胸に置いて音讀するのである。故に事情の如何によりて、名詞、形容詞、代名詞な

文章の改造

どの中、何れかを變ずることになるのである。又男子に關して云つてあることは、女子についても云ふことが来る。それから時の變更例へば *now* から *yesterday*, *to-day* から *in a week* に變ずる場合などには、動詞の形式に就て、多數の變更を惹起すけれども、副詞のそれに就ては變更を起すことは少ない。人稱も又變ずることが出来る。殊に生徒が自分を、話しの主人公になつて居る本田の立場に置くやうな方法で、これを行ふことが出来る。随つて「を」に代へたりすることになるのである。若し希望とあらば、物語から書翰文を作るやうな、さう云ふ大なる變化をもなすことが出来るのである。一人稱から三人稱に變ずることは、直説法を間接法に改造する時法上の變更と容易に結合することが出来る。それで *Oh well, Mr. Honda, said Tanaka, what is it that you are going to do to-morrow? I don't know, said Honda.* のやうな文章は *Tanaka asked Honda what he was going to do to-morrow, and Honda answered that he did not know* に變更することが出来る。獨逸語では、この種の變更には、人稱、動詞の法、語の順序等が關係して、複

雜した改造になるから、英語よりも後にならなければ要求するとは出来ないのである。併し間接法から直説法に變更することは、そんなに面倒なことはない。それから能動から被動に變ずるとは、よく注意して行はねばならぬ。これは意味の變更を行はずに、能動から被動に變更することの出来る文章は割合に少なく、大抵の文章は全くさう云ふ變更に供せられないことがないからで、その理由を今説明するとも又理解することも容易でない。同様に否定の文章を肯定にすることが出来、随つて吾々に純粹なたはごとを與へない結合した章句は、割合に寥々たるものである。故にこの最後に見えて居る二種の變更は、通則として單に原文に適用することが出来るもので、それは教師がその章句の中から抽出しなければならぬ。併しながら若しこの方法を注意深く選擇すれば、この種の文章の甚だ有益なことが分るであらう。殊に佛蘭西語ではさうで、*ne* と *pas* の正しい地位がそんなに重要なのである。それが獨逸語になると、佛蘭西語の場合ほど有益ではない。

又從屬句例へば關係句、副詞句の如きものを、獨立句に變ずることも偶には出来る。隨つて又なほ一層複雑した變更を行ふことも出来、それによりてその章句の思想を結合すべき異なつた方法を試みることも出来るのである。

勿論この種の練習方法を混合して實施することも、又可能事である。

この方法は例へば、甲生徒は音讀する、教師は文章の了りに及んで、彼を中止せしめ、さて如何なる種類の變更を行ふべきかを指示し、それから他の生徒を一人(その者の書物は閉ちて)指名して變更をなさしめるのである。併し教師はかう云ふ練習をして、ためにある定つた法則に従つて行はれるやうな、單に機械的なものにして了はないやうに心がけねばならぬ。又生徒の方では、自分が新たに作つた文章が、果して意味をなして居るかどうかを考へる習慣になつて居なければならぬ。即ちそれによりて生徒の語法上に於ける直覺力も又論理の力も、同時に鋭敏になるのである。

以上の練習方法を混合する

第八章 語法教授上の要點 (その二)

今迄吾々は外國語の文法を生徒に教へるために使用すべき方法に關する問題に、よい加減かゝづらはつた。余は先づ次にペテルセン(N. M. Petersen)氏の北方言語學(Sprogkundskab i Norden 合本、千八百七十年コーペンハーゲン版)の中から、少しく引用して、この問題に關する余の論議を紹介して見やうと思ふ。

『その方法に關しては、人工的のものは放棄し去りて、一層自然的なものを採用しなければならぬ。この人工的方法に従ふと、先づその第一の仕事は、生徒に文法書を與へて、何もかも斷片になつて居るから、一片又一片とそれを生徒の身體に詰込むのである。それで生徒の身體は、互に關係のない、又世界中の何物とも關係のない語例で一杯になつて居る中その身體には、言葉が一杯に這入つて居つて、その半分丈は折々出

ペテルセン氏の所論